一　本　松　遺　跡

—市道釜淵谷地・上野線建設関連発掘調査報告書—

2008.3

盛岡市・盛岡市教育委員会

例　　言

1．本書は、岩手県紫波郡矢巾町大字赤林地内に所在する一本松遺跡の発掘調査報告書である。

2．本書は、平成19年度に実施した埋蔵文化財調査事業にともなう調査成果の報告書である。なお、19年度以前も盛岡市教育委員会で一本松遺跡は発掘調査（第２～７次調査）を実施しているが、それらの内容については紙面の都合上、調査区全体図および遺物実測図のみを掲載した。

3．本書は遺構および遺物の実測図などの資料呈示を意図して、編集執筆に佐々木亮二、神原雄一郎があたり、千田和文、室野秀文、津嶋知弘、菊地幸裕、三浦陽一、今野公顕、花井正香が協議して編集した。

4．遺構の平面位置は、平面直角座標Ｘ系を座標変換した調査座標で表示した。

調査座標原点	Ｘ－39,000,000	＝	ＲＸ±0.000
	Ｙ＋25,000,000	＝	ＲＹ±0.000

5．高さは標高値をそのまま使用している。

6．土層図は堆積のあり方を重視し、線の太さを使いわけた。土層註記は層理ごとに本文でふれ、個々の層位については割愛した。なお、層相の観察にあたっては『新版標準土色帖』（1994小山正忠・竹原秀雄編著　日本色研事業㈱発行）を参考にした。

7．遺構記号は次のとおりである。なお、縄文・弥生時代の遺構番号は 001 ～、奈良・平安時代の遺構番号は 101 ～、近世以降の遺構番号は 701 ～としている。

	遺　構	記号	遺　構	記号	遺　構	記号	番　　号
記号	竪穴住居跡	ＲＡ	土　　坑	ＲＤ	溝　　跡	ＲＧ	縄文・弥生　001 ～
	建　物　跡	ＲＢ	竪　　穴	ＲＥ	集積・配石	ＲＨ	古代（竪穴住居跡）101 ～
	柱　列　跡	ＲＣ	焼土遺構	ＲＦ	井　　戸	ＲＩ	古代（土　坑）　101 ～
							近世　701 ～

8．調査体制　―平成19年度―

教育長	八巻恒雄
教育部長	宇夫方正人
教育次長	菅原康一
歴史文化課長兼遺跡の学び館館長	武石幸久
歴史文化課課長補佐	武藤英富（文化財史跡担当）、佐藤和男（遺跡の学び館担当）
副主幹	千田和文
文化財主査	室野秀文、菊池幸裕、津嶋知弘
文化財主任	三浦陽一、神原雄一郎、権頭裕子
文化財主事	今野公顕、花井正香、佐々木亮二
文化財調査員	鈴木賢治、浅沼のぞみ

また、調査の実施及び報告書の作成にあたり下記の方々より多大な御援助と御協力を賜った。ここに御芳名を記して深く謝意を表する（五十音順、敬称略）

［発掘調査・室内整理作業］

長内理恵、工藤繁子、工藤則子、齊藤静子、佐藤公一、澤野むつ子、谷藤貴子、女鹿麗子

［調査協力・助言］

岩手県教育委員会、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、矢巾町教育委員会

9．発掘調査にともなう出土遺物および諸記録は、盛岡市遺跡の学び館で保管している。

10. 土器の区分は、土師器・須恵器・あかやき土器にわけた。

11. 遺物の表現については以下のとおりである。

1．土器

a．土器は1/3スケールとした。

b．挿図の土器配列については、出土層位を重視しさらに器種・モチーフでまとめた。

☆挿図中の記号・番号は、出土遺物の出土地点および層位を表す。

（例）Ｉ４－Ａ１，A_1

↓　↓　↓

※１　※２　※３

※１　調査座標原点ＲＸ±０　ＲＹ±０を起点として、Ｘ・Ｙ両軸を50m毎に区切る大グリットを設定し、Ｘ軸線上を西から東へＡ・Ｂ・Ｃ…Ｗ・Ｘ・Ｙ、Ｙ軸線上を北から南へ１・２・３…23・24・25と付し、北西隅のこれらのアルファベットとアラビア数字の組合せを、大グリットと呼称した（第３・４図）。

※２　大グリットを２ｍ毎に細分割し、小グリットを設定し大グリットの呼称を再び用いた。よって、大グリット－小グリットという組合せで、遺物の平面出土地点を２ｍごとに表示した。

（例）Ｉ４－Ａ１はＲＸ－150　ＲＹ－100を北西隅とする２ｍグリットからの出土を示す。

※３　遺物の出土層位を表す。

12. 各遺構の平面図で、複数の遺構を同一図面に表示する場合、説明する遺構は実線で表し、重複遺構は二点鎖線で表した。

13. 遺跡範囲については、過去の調査成果と遺跡の地形、遺物の散布状況をもとにして、推定の範囲を表している。

目　　次

例　　言
目　　次
挿図目次・図版目次・表目次

Ⅰ．調査経過
　１．調査経過 …… 1
　２．地形・地質 …… 2
　３．周辺の遺跡 …… 2
Ⅱ．調査成果
　１．過去の調査 …… 4
　２．平成19年度調査 …… 10
　３．出土遺物 …… 20
　４．まとめ …… 26

挿図目次

第１図　一本松遺跡位置図 …… 1
第２図　地形分類と周辺の遺跡分布 …… 3
第３図　一本松遺跡全体図 …… 5
第４図　第３次調査区全体図 …… 7
第５図　第４・５次調査区全体図 …… 8
第６図　第７次調査区全体図 …… 9
第７図　第８次調査区全体図 …… 10
第８図　ＲＡ１３６竪穴住居跡 …… 11
第９図　ＲＡ１３７竪穴住居跡 …… 13
第10図　ＲＡ１３８竪穴住居跡 …… 15
第11図　ＲＡ１３９竪穴住居跡、ＲＥ１０５竪穴跡 …… 16
第12図　ＲＡ１４０竪穴住居跡、ＲＥ７０１竪穴跡 …… 17
第13図　ＲＤ１０７～１０９土坑 …… 18
第14図　ＲＧ１０３溝跡、ピット群 …… 19
第15図　ＲＡ１０９～１１３・１１５竪穴住居跡出土遺物 …… 22
第16図　ＲＡ１１７～１２１竪穴住居跡出土遺物 …… 23
第17図　ＲＡ１２３～１２７竪穴住居跡出土遺物 …… 24
第18図　ＲＡ１２９・１３１・１３３・１３６～１３９竪穴住居跡、ＲＥ１０２竪穴住居跡出土遺物 …… 25

写真図版目次

第１図版　第３次調査区全景
第２図版　第３次調査　ＲＡ１０９・１１０竪穴住居跡
第３図版　第３次調査　ＲＡ１１２・１１３竪穴住居跡
第４図版　第３次調査　ＲＡ１１５・１２３竪穴住居跡
第５図版　第３次調査　ＲＡ１２５竪穴住居跡、ＲＥ１０３竪穴跡
第６図版　第４次調査　ＲＡ１３３竪穴住居跡、ＲＢ１０２掘立柱建物跡
第７図版　第５次調査全景
第８図版　第５次調査　ＲＡ１３４竪穴住居跡、ＲＧ１０１溝跡
第９図版　第５次調査　ＲＧ７１１・７１４溝跡
第10図版　第６次調査　試掘トレンチ
第11図版　第７次調査区全景、ＲＧ７１５溝跡
第12図版　第７次調査　ＲＧ７１７・７１９溝跡
第13図版　第８次調査区全景
第14図版　第８次調査　ＲＡ１３６・１３７竪穴住居跡
第15図版　第８次調査　ＲＡ１３９竪穴住居跡、鉄製鋤先出土状況
第16図版　ＲＡ１０９・１１１・１１７・１１９・１２０・１２１竪穴住居跡出土遺物
第17図版　ＲＡ１２４～１２７・１２９・１３１・１３９竪穴住居跡、ＲＥ１０２竪穴跡出土遺物

表　目　次

第１表　一本松遺跡調査成果一覧 …… 4

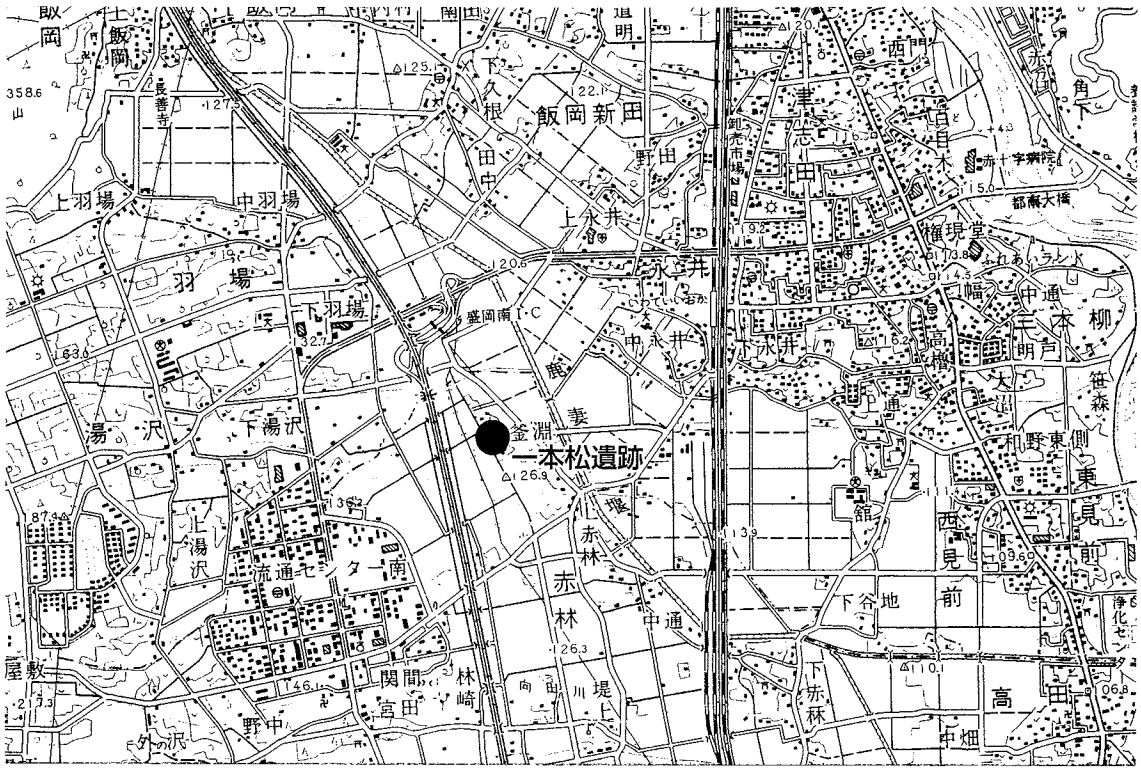
Ⅰ．調査経過

１．調査経過

遺跡の位置　一本松遺跡は、ＪＲ岩手飯岡駅から西に約２km、紫波郡矢巾町大字赤林地内、東北自動車道盛岡南インターから南に500m、盛岡市中央卸売市場の西側に所在する。現況は水田・宅地等で、標高は125～128mである。

調査経緯　本来、一本松遺跡は盛岡市の南に隣接する矢巾町内に存在する遺跡である。しかし、平成13年に新設された盛岡市中央卸売市場（盛岡市羽場10地割大島）に繋がる盛岡市道釜淵谷地上野線が、一本松遺跡内を経由するため、その取扱いについて矢巾町教育委員会と協議を行うこととなった。その結果、調査原因が盛岡市の事業によること、市道であるため土地の所有も盛岡市になる等々で、市教育委員会で発掘調査を実施することとなった。

調査体制　一本松遺跡に関連する発掘調査事業は、盛岡市教育委員会歴史文化課、都市整備部道路建設課の両課で対応した。調査に関連する予算事務については道路建設課が行い、埋蔵文化財発掘調査及び調査報告書の作成・刊行については文化課文化財係（平成13～15年度）、盛岡市遺跡の学び館（平成16～18年度）、歴史文化課（平成19年度～）が担当した。



第１図　一本松遺跡位置図（１：50,000）

2．地形・地質

奥羽山脈より東流する雫石川は、雫石盆地を形成し、盛岡市北の浦付近において急激に流路が狭められ、北上平野に流れ込む。雫石川北岸と南岸ではその地質が大きく異なる。

雫石川北岸には、岩手山起源の大石渡岩屑なだれ堆積物を基盤とした火山灰砂台地（滝沢台地）が広がっている。その範囲は盛岡市北部から滝沢村北部まで広範囲に及んでいる。

雫石川南岸は、雫石川の流路転換によって運ばれた土砂で形成された低位沖積段丘が広がっている。この沖積段丘上には、主に古代から江戸時代にかけての遺跡が多数確認されている。現在は宅地造成や圃場整備が進み、ほとんど旧地形を留めていないが、航空写真等を見ると旧河道の流路が、残された水田や古い住宅街の区割り等で確認できる。

一本松遺跡は、この沖積段丘よりもさらに一段高い中位砂礫段丘上に立地している。この中位段丘は奥羽山脈から流れ出る河川によって形成された扇状地性の河岸段丘であり、盛岡以南、奥州市に至るまで広範囲に拡がっている。

3．周辺の遺跡

志波城跡　周辺には古代の遺跡が多く点在している。本遺跡の北西4.5kmのところに古代陸奥国城柵「志波城跡」がある。志波城は延暦22（803）年に造営され、その後、雫石川の氾濫による水害を理由に南の徳丹城（矢巾町）にその機能を移すまで約10年間存在していた。これまでの調査で、陸奥国最北に位置し、外郭と政庁規模は鎮守府胆沢城を上回り、陸奥国府であった「多賀城跡」に匹敵することが判明している。陸奥国最北端の行政府として、さらに北方のエミシに対する拠点として重要な役割を担っていたと考えられる。

周辺の調査事例　本遺跡の周辺で、発掘調査が実施された遺跡には大島遺跡と下羽場・下湯沢遺跡がある。大島遺跡は北東側の段丘下に、下羽場・下湯沢遺跡は湯沢川を挟んで北西側に立地する。

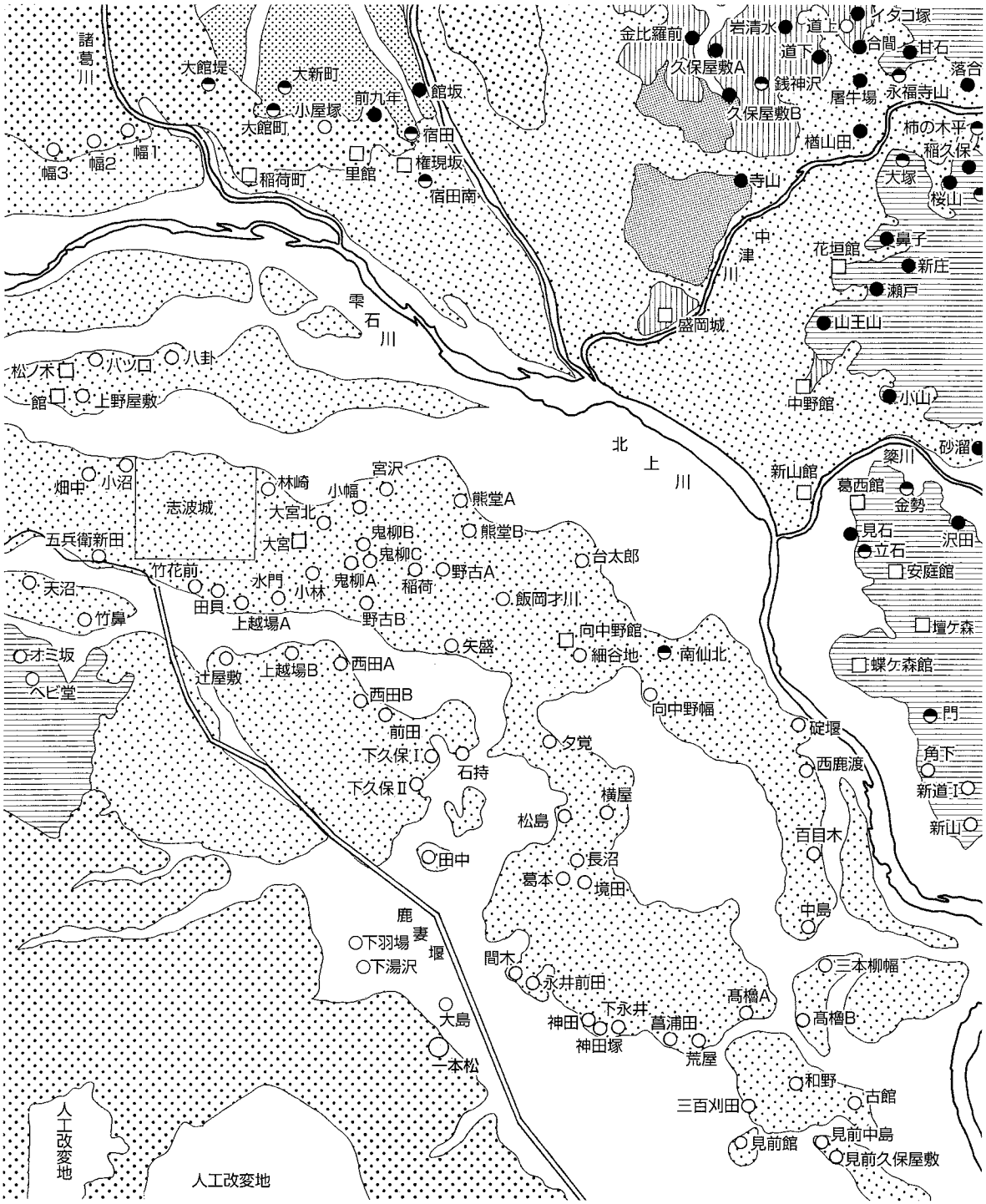
大島遺跡　大島遺跡は盛岡市中央卸売市場の建設に伴い、盛岡市教育委員会により平成10～11年にかけて発掘調査が行われた。旧河道の氾濫原に立地し、市内でも最も低い場所にある遺跡である。8世紀及び9世紀後半～10世紀中ごろの竪穴住居跡129棟と掘立柱建物跡20棟などが確認されている。8世紀の竪穴住居跡はまばらに分布しているが、9世紀後半～10世紀中ごろの竪穴住居跡と掘立柱建物跡は、低地にはさまれた複数の帯状の微高地上に大きく3箇所にわかれて密集している。竪穴住居跡からは「鉈尾」や「丸鞆」といった石帯具が出土している。

下羽場・下湯沢遺跡　下羽場・下湯沢遺跡は東北縦貫自動車道建設に伴い、昭和49～51年に岩手県教育委員会により調査が行われている。9世紀前半の竪穴住居跡4棟や、9世紀後半～10世紀前半の竪穴住居跡25棟が発見されており、遺跡の東端部では9世紀代と考えられる円形周溝墓が確認され、須恵器長頸瓶や、坏に「二万」などと記された多くの墨書土器が出土している。

【引用・参考文献】

盛岡市教育委員会　1998「大島遺跡第1・2次発掘調査現地説明会資料」

岩手県教育委員会　1979「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告-Ⅱ-」岩手県文化財調査報告書第32集



第2図　地形分類と周辺の遺跡分布

Ⅱ．調査成果

1．過去の調査

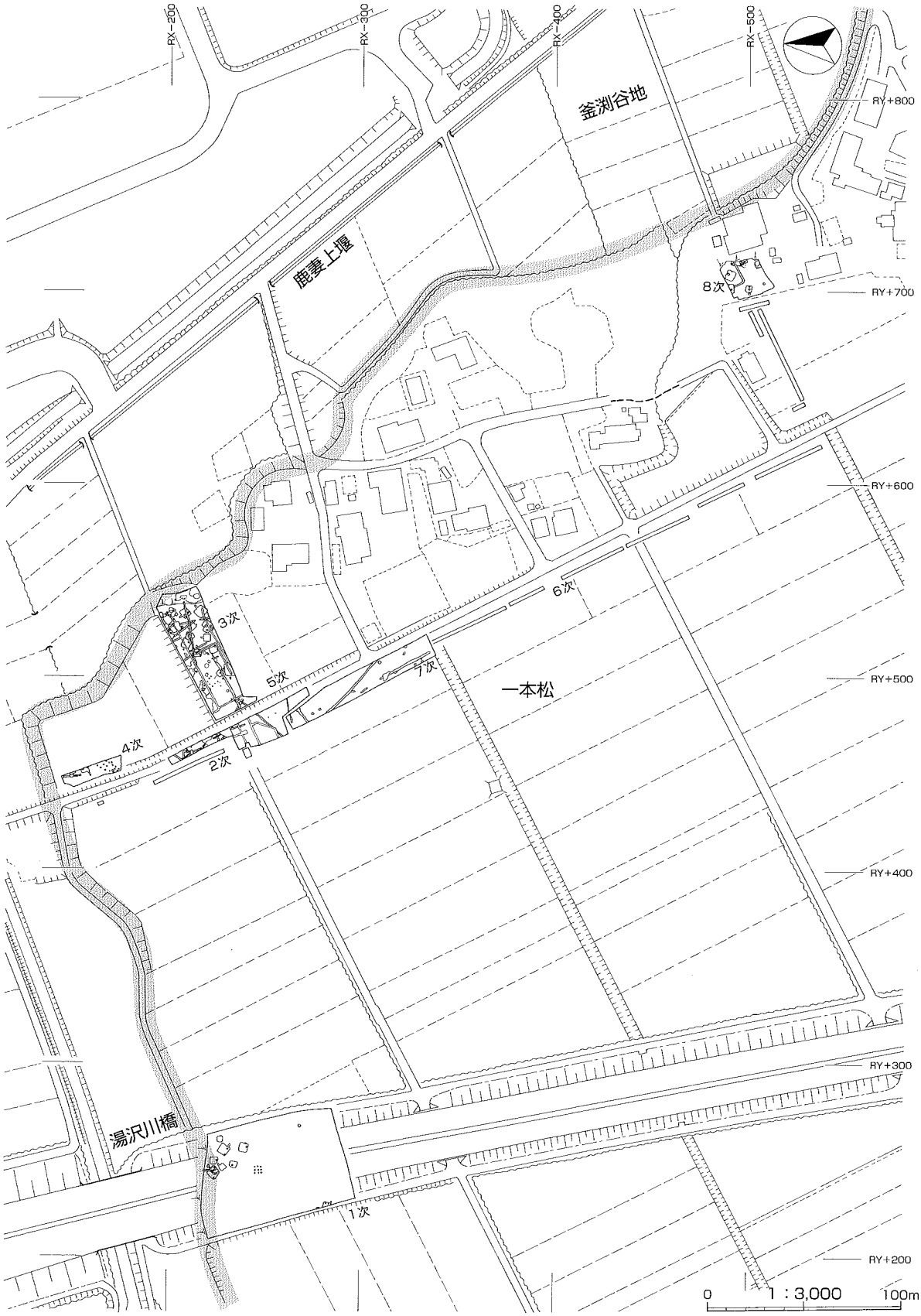
一本松遺跡は、昭和50年に東北縦貫自動車道建設に伴い、岩手県教育委員会によって調査が行われて以来、今年度を含めてこれまでに本調査６件、試掘調査２件を実施している。東北縦貫自動車道建設以後は、全て盛岡市による市道建設に伴う調査である。

次　数	所　在　地	調 査 原 因	面　積	期　　間	主な検出遺構
県教１	紫波郡矢巾町大字赤林字一本松54	東北縦貫自動車道建設	2,000㎡	75.09.10 75.12.04	平安時代の竪穴住居跡 掘立柱建物跡 縄文時代の陥し穴
試掘２	紫波郡矢巾町大字赤林第３地割内	市道建設	852㎡	99.12.15 99.12.20	竪穴住居跡等多数検出
3	紫波郡矢巾町大字赤林第１地割170番１	市道建設	1,411㎡	01.04.23 01.06.06	平安時代の竪穴住居跡 竪穴跡、土坑、 近世以降の溝跡、土坑
4	紫波郡矢巾町大字赤林第１地割170番１	市道建設	292㎡	01.12.06 01.12.20	平安時代竪穴住居跡 土坑、掘立柱建物跡 溝跡
5	紫波郡矢巾町大字赤林第１地割170番１	市道建設	600㎡	02.04.08 02.05.10	平安時代の竪穴住居跡、 溝跡 近世以降の溝跡
試掘６	紫波郡矢巾町大字赤林第１地割174－１	市道建設	882㎡	04.03.15 04.03.18	溝跡検出
7	紫波郡矢巾町大字赤林第１地割	市道建設	1,574㎡	05.11.04 05.11.24	近世以降の溝跡、 焼土遺構
8	紫波郡矢巾町大字赤林第２地割132－８	市道建設	395㎡	07.08.03 07.09.14	平安時代の竪穴住居跡、 竪穴跡、土坑、溝跡 近世以降の竪穴跡

第１表　一本松遺跡調査成果一覧

第１次調査　第１次調査区は遺跡北側の湯沢川に面した段丘縁辺部に位置している。平安時代の竪穴住居跡８棟、掘立柱建物跡１棟と縄文時代の陥し穴２基が確認されている。竪穴住居跡のほとんどは北側の段丘縁辺に密集しており、埋土に灰白色火山灰（粉状パミス）を含む竪穴住居跡は８棟中３棟で確認されている。調査面積は2,000㎡である。

第２次調査　第２次調査は、平成11年度に盛岡市市道建設に伴う事前の試掘調査として行った。市道建設予定地の盛岡市側と矢巾町側に、それぞれ試掘トレンチを掘った結果、矢巾町側の段丘東縁辺部に多数の竪穴住居跡や溝跡が確認され、次年度以降に本調査を実施することとなった。調査面積は852㎡である。



第３図　一本松遺跡全体図

第３次調査　第３次調査は、第２次試掘調査で遺構が確認された段丘東縁辺部で行った。調査区内からは縄文時代の陥し穴状遺構２基、奈良時代の竪穴跡１棟、平安時代の竪穴住居跡22棟、竪穴跡３棟、土坑７基、近世以降の掘立柱建物跡１棟、土坑墓３基、土坑18基、溝跡10条が確認されている。調査面積は1,411㎡である。

遺構の大半は耕田と暗渠による撹乱を受けており、特に調査区西側で検出された竪穴住居跡は、壁が削平され床面だけが残されているなど、残存状況はあまりよくなかった。調査区内の地形は西から東に向かって徐々に傾斜し、調査区東端で段丘崖となっている。

竪穴住居跡の多くは、調査区東の段丘縁辺側に密集して検出された。竪穴住居跡で大型のもので一辺の大きさが約６ｍをはかる。小型のものは一辺の大きさが３ｍ前後である。カマドの造り替えが行われている住居跡は、ＲＡ１１１・１１３・１２６竪穴住居跡の３棟である。また、埋土に灰白色火山灰（粉状パミス）含まれる竪穴住居跡は、ＲＡ１１２・１１７・１２０・１２３竪穴住居跡の４棟で比較的、近距離に集まっている。ＲＥ１０２竪穴跡からは、非ロクロ成形の体部に段を持つ土師器坏（第18図３）が出土しており、一本松遺跡の調査でこれまでに確認された古代の遺構の中では、最も古い時期に比定されると考えられる。

溝跡は竪穴住居跡と同様に、後世の削平によって途中で途切れているものが多い。規模は深さ0.1～0.2m、幅0.5～0.8mのものが多く、埋土の状況からすべて近世以降と考えられる。ＲＧ７０１～７０３溝跡は東西方向から南北方向へと直角に屈曲しており、当時の水田の用水路兼区割りであった可能性が高い。ＲＧ７０７溝跡は段丘崖に向かって延びており、排水のための施設と考えられる。

段丘崖に並んで検出されたＲＤ７１６～７１８土坑は、埋土に骨片・骨粉が混入し、人為堆積によるものであることから土坑墓と考えられる。

縄文時代の遺構は、平面形が溝状の土坑が２基確認されている。第１次調査でも同様の遺構が確認されており、市内各地の発見例やその形状から陥し穴と考えられる。

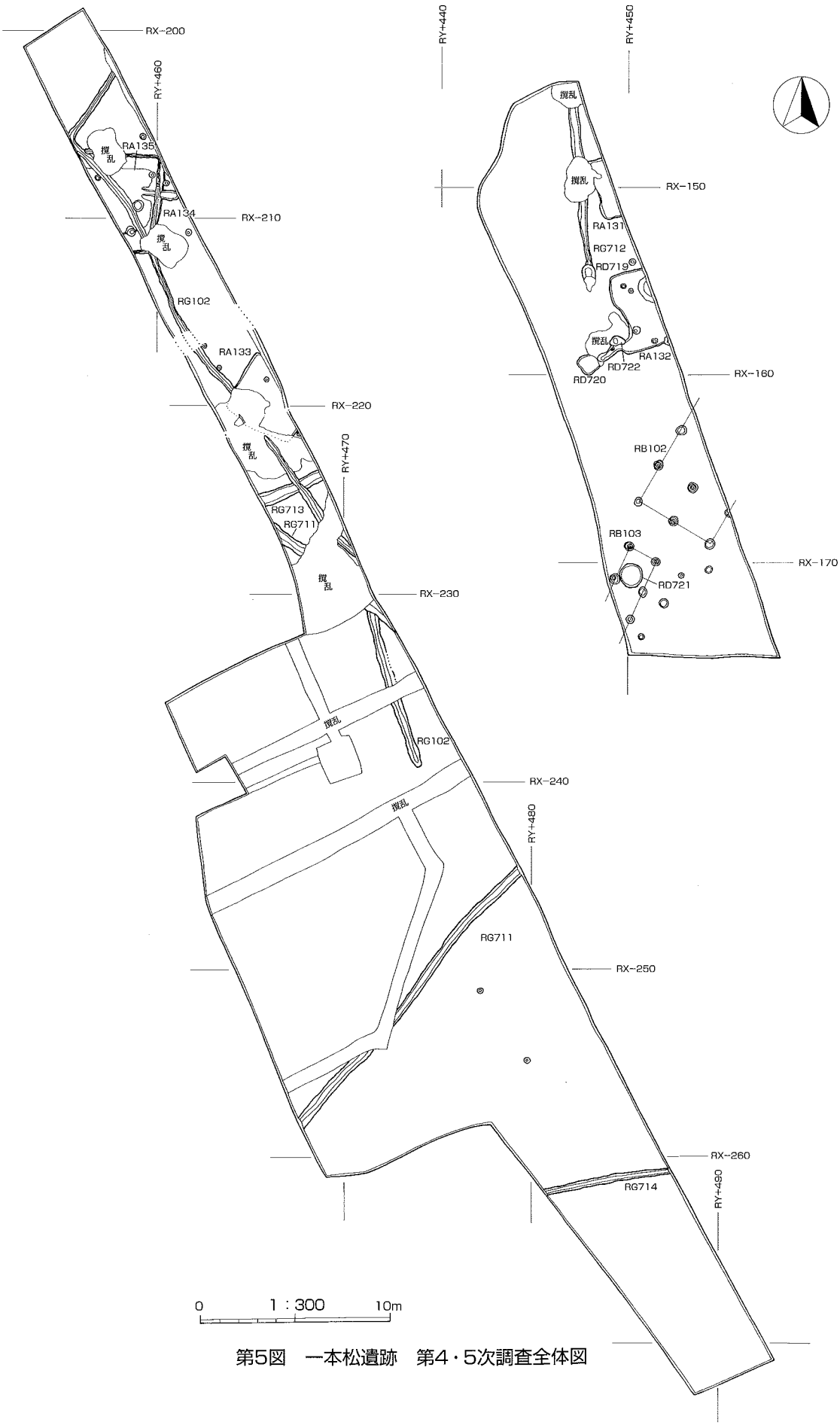
第４次調査　第４次調査では平安時代の竪穴住居跡２棟、掘立柱建物跡２棟、近世以降の土坑３基と溝跡１条が確認された。調査面積は292㎡である。

第５次調査　第５次調査では平安時代の竪穴住居跡２棟、溝跡１条、近世以降の溝跡３条が確認されている。竪穴住居跡は建て替えが行われており、その際に規模が大きくなっていることが分かった。また、その竪穴住居跡を切るＲＧ１０１溝跡の埋土には、灰白色火山灰（粉状パミス）が含まれていた。近世以降の溝跡（ＲＧ７１１・７１３）は東に隣接する第３次調査区で確認された溝跡と連続するもので、３次調査同様、水田等の区割りであると考えられる。調査面積は600㎡である。

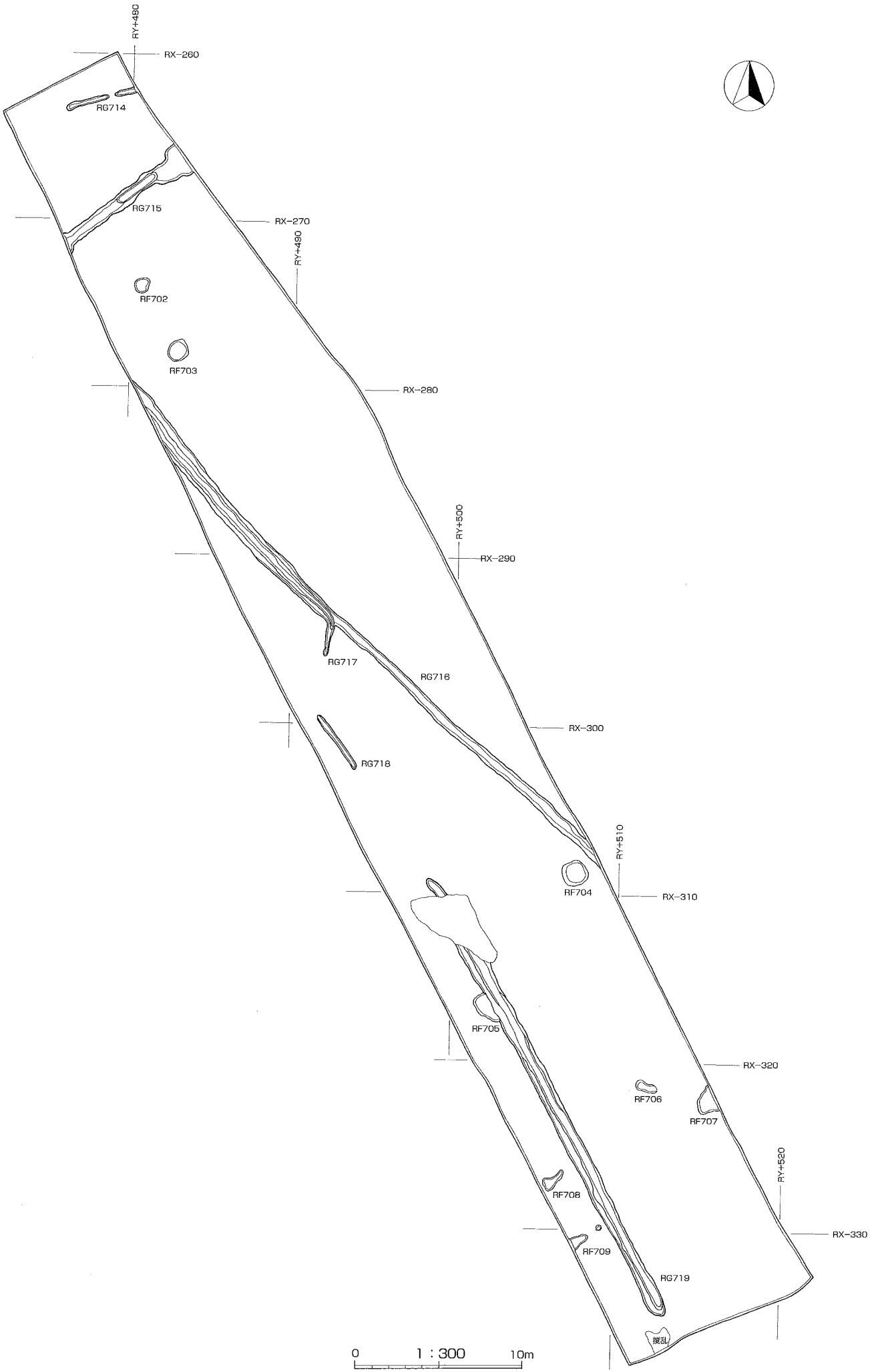
第６次調査　第６次調査は市道延長部分の試掘調査として行った。試掘トレンチの一部分で遺構が確認されたため、次年度以降に本調査を実施することとなった。調査面積は882㎡である。

第７次調査　第７次調査は、前年度の試掘調査（第６次）で確認された箇所を本調査として行った。近世以降の溝跡６条と焼土遺構８基が確認された。調査面積は1,574㎡である。

第4図　一本松遺跡　第3次調査全体図



第5図　一本松遺跡　第4・5次調査全体図



第6図　一本松遺跡　第7次調査全体図

２．平成19年度調査

位　　置　平成19年度の調査は、市道建設に伴う事前調査で遺跡南東部の段丘縁を、第８次調査（第７図）として実施した。調査区内の標高値は、125m前後である。

検出遺構　主な検出遺構は、竪穴住居跡４棟（ＲＡ１３６～１４０）・竪穴跡２棟（ＲＥ１０５・７０１）・土坑３基（ＲＤ１０７～１０９）・溝跡１条（ＲＧ１０３）である。

出土遺物　出土遺物は平安時代の土師器・須恵器、鉄製の鋤先などである。

ＲＡ１３６竪穴住居跡（第８図）

位　　置　調査区北西　　**平 面 形**　方形　　**主軸方向**　不明

規　　模　東－西　上端4.52m、下端3.46m　南－北　上端3.06m以上・下端2.95m以上

重複関係　ＲＧ１０３に切られる　　**掘 込 面**　削平　　**検 出 面**　黄褐色シルト層上面

埋　　土　自然堆積によるものである。Ａ～Ｃ層に大別され、各層はさらに細分される。

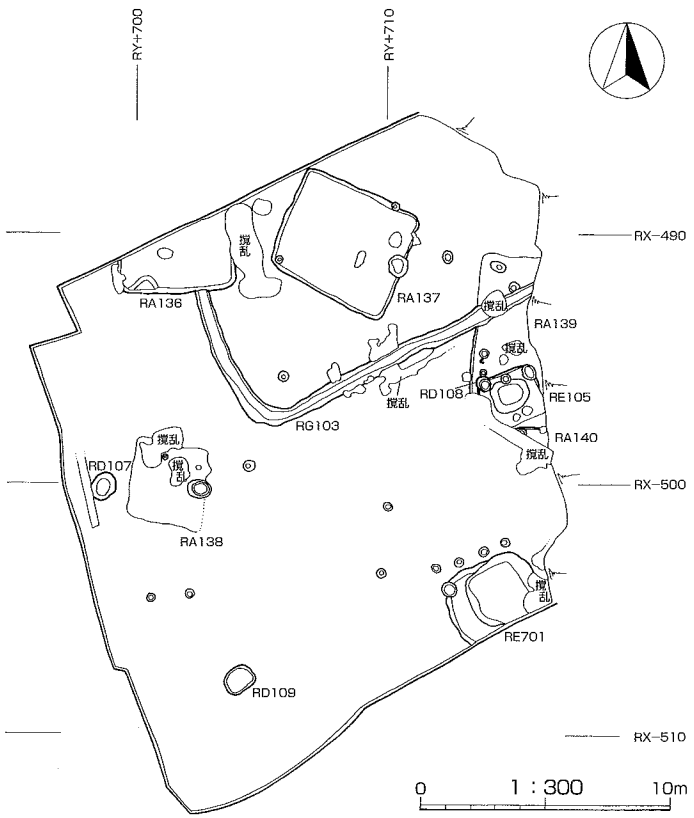
Ａ層－黒褐色土を主体に暗褐色シルトを粒状に含む。２層に細分される。

Ｂ層－黒褐色土を主体に灰白色火山灰を粉～小塊状に含む。２層に細分される。

Ｃ層－黒褐色土を主体に黄褐色シルトを粒状に含む。２層に細分される。

壁の状態　検出面から床面までの深さは0.13～0.36m、外傾して立ち上がる。

床の状態　層厚0.06～0.24mの構築土（Ｌ層）で、黄褐色粘土に暗褐色土を粒状に含む混合土である。中央付近に地床炉があり、0.62×0.46mの範囲で硬く焼きしまっている。南壁の西よりに周囲より



第7図　一本松遺跡　第8次調査全体図

も一段高い土手状の段が設けられている。

出土遺物（第18図９）　９はあかやき土器甕の口縁部である。

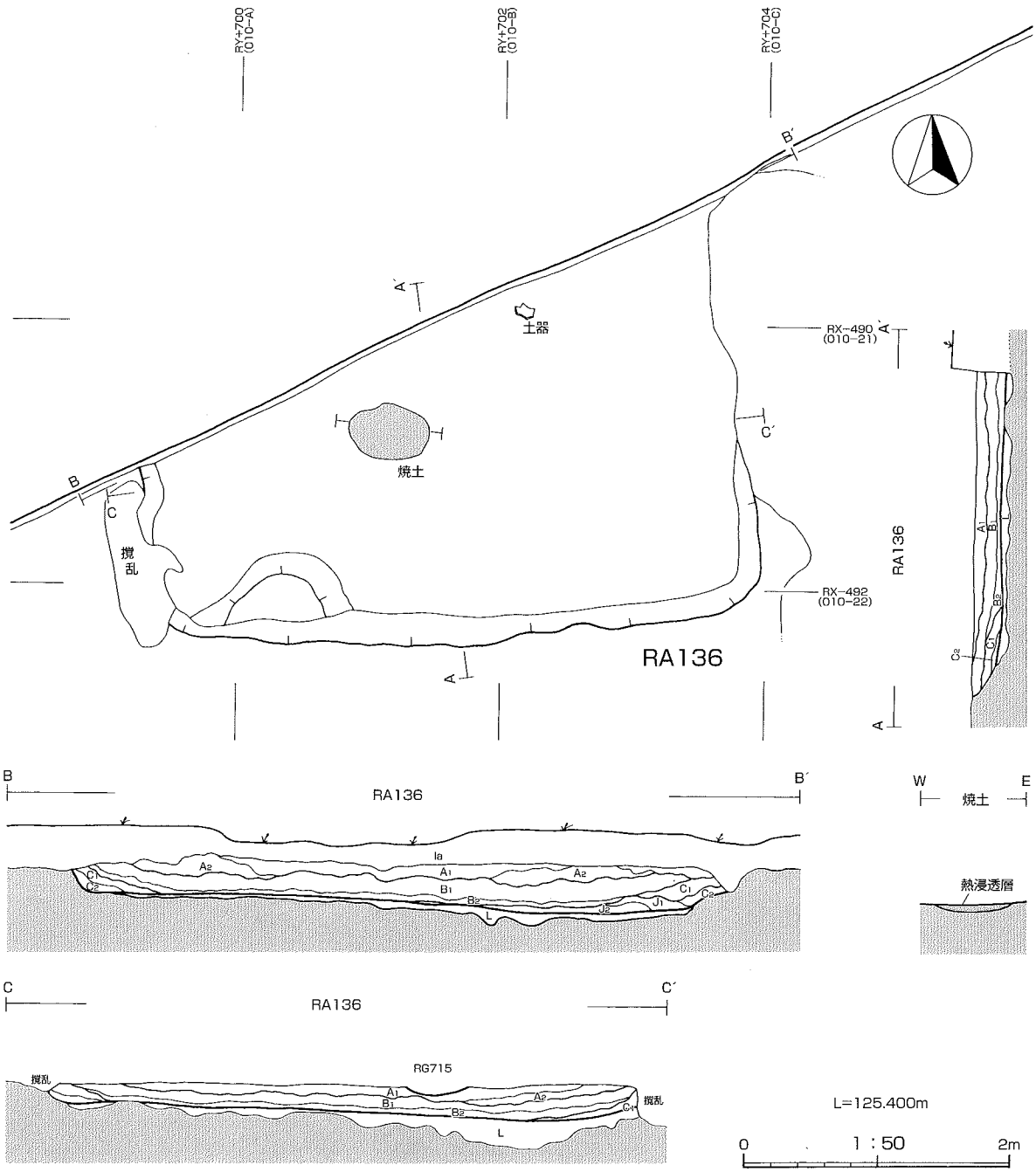
ＲＡ１３７竪穴住居跡（第９図）

位　　置　調査区北　　**平 面 形**　方形　　**主軸方向**　Ｅ５°Ｓ

規　　模　東－西　上端5.13m、下端4.95m　南－北　上端4.52m、下端4.24m

重複関係　なし　　**掘 込 面**　削平　　**検 出 面**　黄褐色シルト層上面

埋　　土　自然堆積によるものである。黒褐色土を主体に暗褐色シルトを粒状に含む。



第8図　RA136竪穴住居跡

壁の状態　検出面から床面までの深さは0.13～0.36ｍ、外傾して立ち上がる。

床の状態　層厚0.12～0.26mの構築土（Ｌ層）で、黄褐色粘土に暗褐色土を粒状に含む混合土である。中央付近に地床炉があり、0.72×0.46mの範囲で硬く焼きしまっている。

かまど　東壁北よりに位置し、煙道部分およびかまど基底部は残存していない。燃焼部は0.62×0.52mの範囲で拡がる。東壁から1.5m東に煙出部がある。

貯蔵穴　かまどの南側に貯蔵穴が掘り込まれていた。規模は0.8mの不整円形で、焼土を多量に含むかまど崩壊土（Ｊ層）が堆積している。その他の柱穴は南西隅で１口検出した。深さは0.16m。

出土遺物（第18図10～12）　10は須恵器の皿である。11はロクロ成形によるあかやき土器の坏である。12は底部が欠損した、あかやき土器の甕である

ＲＡ１３８竪穴住居跡（第10図）

位　置　調査区西　**平面形**　方形　**主軸方向**　Ｗ１°Ｎ

規　模　東－西　3.08ｍ、南－北　3.17ｍ。

重複関係　なし　**掘込面**　削平　**検出面**　黄褐色シルト層上面

埋　土　ほとんど削平されている。　**壁の状態**　削平

床の状態　層厚0.08～0.16mの構築土（Ｌ層）で、黄褐色粘土に暗褐色土を粒状に含む混合土である。中央やや北西よりに焼土の拡がりを確認した。

かまど　東壁北よりに位置し、煙道部分およびかまど基底部は残存していない。燃焼部は0.20×0.18mの範囲で拡がる。燃焼部から1.8m東に煙出部がある。

貯蔵穴　かまどの南側に貯蔵穴が掘り込まれていた。規模は0.76～0.96mの楕円形で、埋土は黒褐色土を主体とし、粒状の褐色土を少量含む。

出土遺物（第18図13･14）　13は内面に黒色処理とミガキを施す土師器坏である。14はロクロ成形の後に、内外面にヘラナデが施される土師器甕である。

ＲＡ１３９竪穴住居跡（第11図）

位　置　調査区東　**平面形**　方形か　**主軸方向**　不明

規　模　東－西　3.08ｍ以上、南－北　5.76ｍ以上。東半分は段丘の崩落により残存していない。

重複関係　RD108、RG103、RE105に切られる　**掘込面**　削平　**検出面**　黄褐色シルト層上面

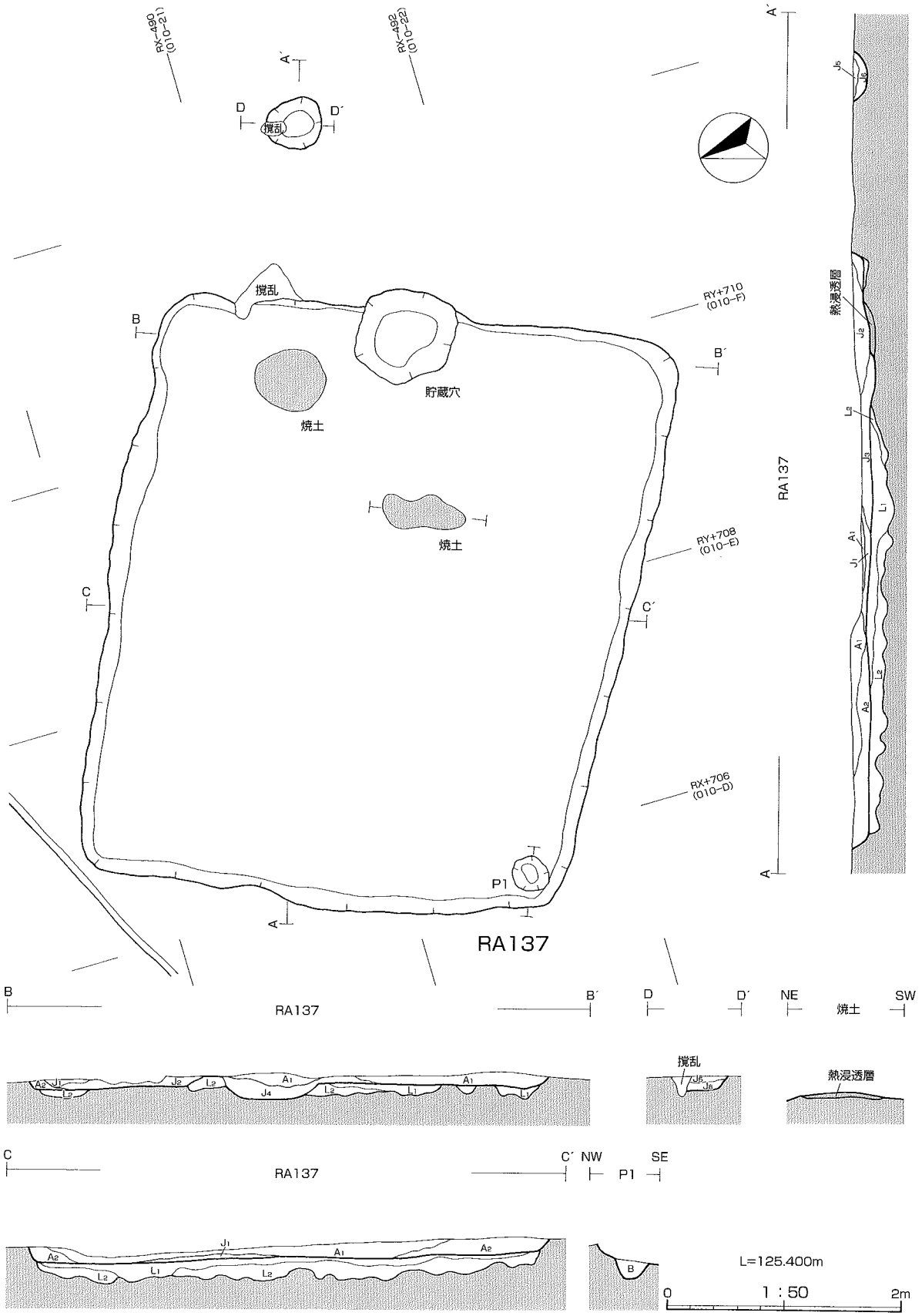
埋　土　Ａ層－黒褐色土を主体とし、黄褐色シルトを粒状に含む。
Ｂ層－暗褐色土を主体とし、粒状の黒褐色土を少量含む。

壁の状態　検出面から床面までの深さは0.12ｍ、外傾して立ち上がる

床の状態　層厚0.06～0.18mの構築土（Ｌ層）で、暗褐色土に黄褐色シルトを粒状に含む混合土である。西壁南よりから鉄製の鋤先が出土している。

柱　穴　５口検出した。それぞれの床面からの深さはＰ１－0.08m、Ｐ２－0.10m、Ｐ３－0.12m、Ｐ４－0.34m、Ｐ５－0.30m。埋土は黒褐色土を主体とし、粒～小塊の黄褐色粘土を含む。

出土遺物（第18図15）　15は鉄製の鋤先である。



第9図　RA137　竪穴住居跡

ＲＥ１０５竪穴跡（第１１図）

位　　置　調査区東　　**平 面 形**　方形

規　　模　東－西　2.28 m以上、 南－北　2.14 m。　**重複関係**　ＲＡ１３９を切る

掘 込 面　削平　　**検 出 面**　ＲＡ１３９竪穴住居跡上面

埋　　土　Ａ層は黒褐色土を主体とし、黄褐色シルトを粒状に含む。

壁の状態　検出面から床面までの深さは 0.08 m、外傾して立ち上がる

床の状態　中央部を大きく掘り込んでから人為的に埋めて床面を構築している。

ＲＡ１４０竪穴住居跡（第１２図）

位　　置　調査区東　　**平 面 形**　不明。かく乱による削平が著しく、北壁の一部のみ残存。

規　　模　東－西　1.07 m以上、 南－北　1.91 m以上。　**重複関係**　なし

掘 込 面　削平　　**検 出 面**　黄褐色シルト層上面

埋　　土　黒褐色土を主体とし、黄褐色シルトを粒状に含む。

壁の状態　検出面から床面までの深さは 0.06 m、外傾して立ち上がる

床の状態　層厚 0.04 ～ 0.12 mの構築土（Ｌ層）で、黒褐色土に黄褐色粘土を塊状に含む混合土である。

柱　　穴　北壁よりに１口検出した。床面からの深さは 0.18m、埋土は黒褐色土を主体とし、粒～小塊の黄褐色粘土を含む。

ＲＥ７０１竪穴跡（第１２図）

位　　置　調査区南東　　**平 面 形**　隅丸方形か

規　　模　東－西　3.82 m　南－北　2.66 m以上。　**重複関係**　ＲＡ１３９を切る

掘 込 面　削平　　**検 出 面**　黄褐色シルト層上面

埋　　土　Ａ層－黒褐色土を主体とし、粒状の黄褐色シルトを少量含む。
Ｂ層－黒～黒褐色土を主体とし、粒状の黄褐色シルトをやや多く含む。
Ｃ層－黒色土を主体とし、粒状の黄褐色シルトをやや多く含む。２層に細分される。

壁の状態　検出面から床面までの深さは 0.18 ～ 0.38 m、外傾して緩やかに立ち上がる

床の状態　中央部で一段下がる。　**出土遺物**　なし

ＲＤ１０７土坑跡（第１３図）

位　　置　調査区西　　**平 面 形**　楕円形　　**規　　模**　長軸 1.16 m、短軸 0.92 m。

重複関係　なし　　**掘 込 面**　削平　　**検 出 面**　黄褐色シルト層上面

埋　　土　自然堆積による。黒褐色土を主体とするＡ層は２層に細別される。Ｂ層は褐色土を主体とし、黒褐色土を粒状に含む。Ｃ層は黄褐色土を主体とし、褐色土を粒状にやや多く含む。

壁の状態　検出面から底面までの深さは 0.32 m。壁は外傾して緩やかに立ち上がる。

底面の状態　ほぼ平坦　　**出土遺物**　なし

ＲＤ１０８土坑跡（第１３図）

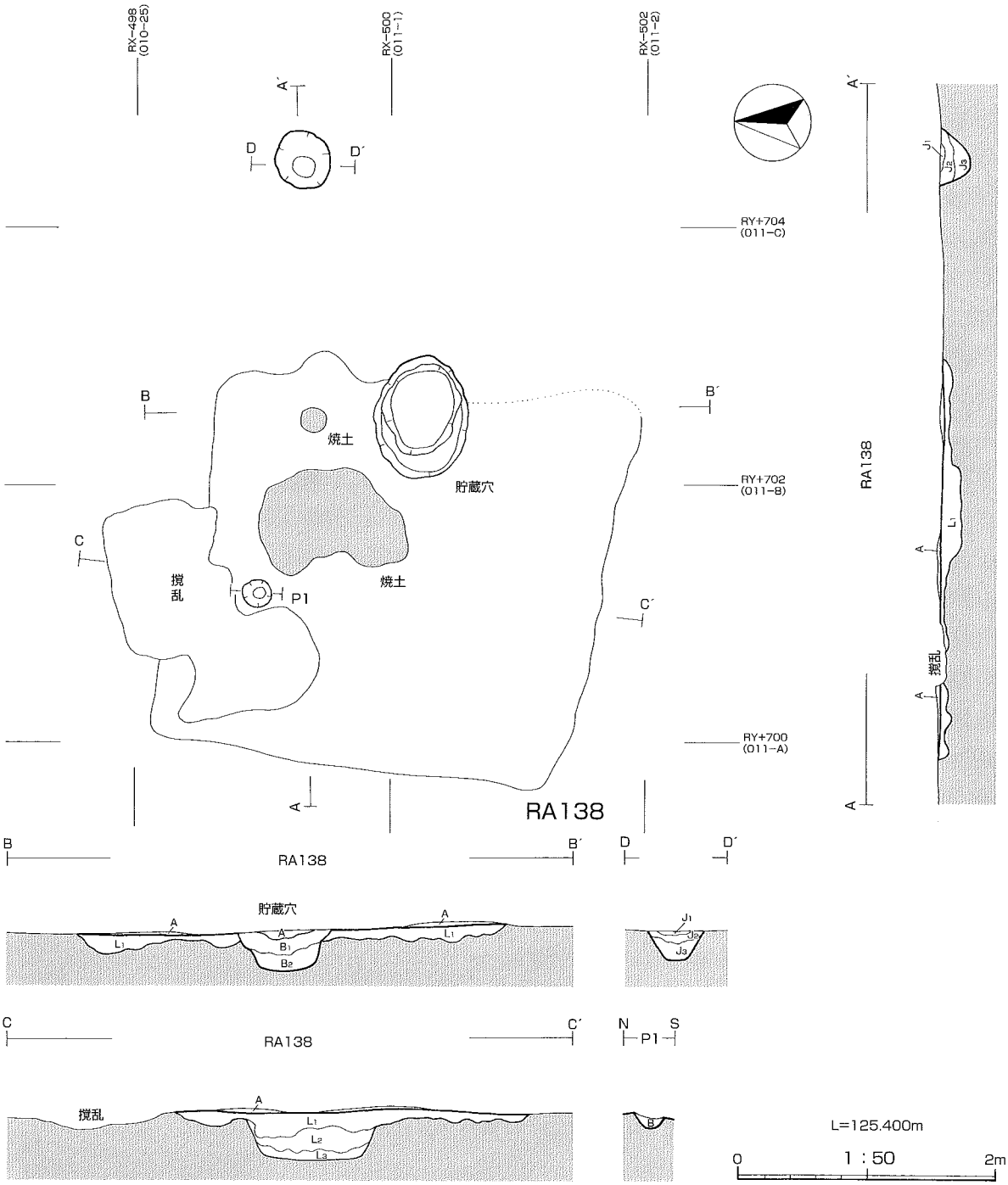
位　　置　調査区東　　**平 面 形**　不整円形　　**規　　模**　0.58 ～ 0.62 m

重複関係　ＲＡ１３９、ＲＥ１０５を切る。　**掘込面**　削平　**検出面**　ＲＡ１３９上面

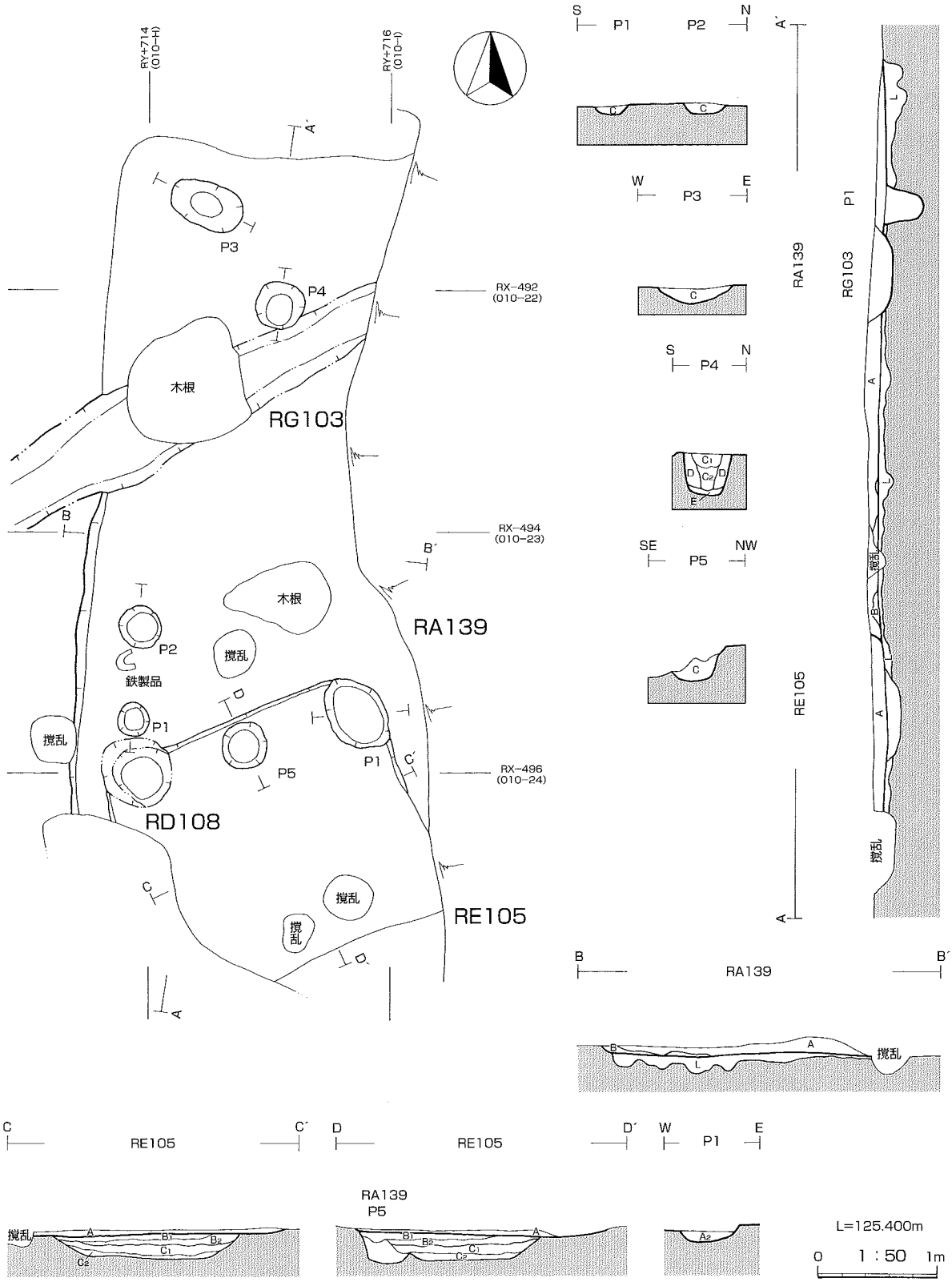
埋　　土　自然堆積による。Ａ・Ｂ層ともに黒褐色土を主体とするが、Ａ層は粒状の黄褐色土を微量に含み、Ｂ層は黄褐色粘質土を多量に含む。

壁の状態　検出面から底面までの深さは0.18～0.20ｍをはかり、壁は外傾して立ち上がる。

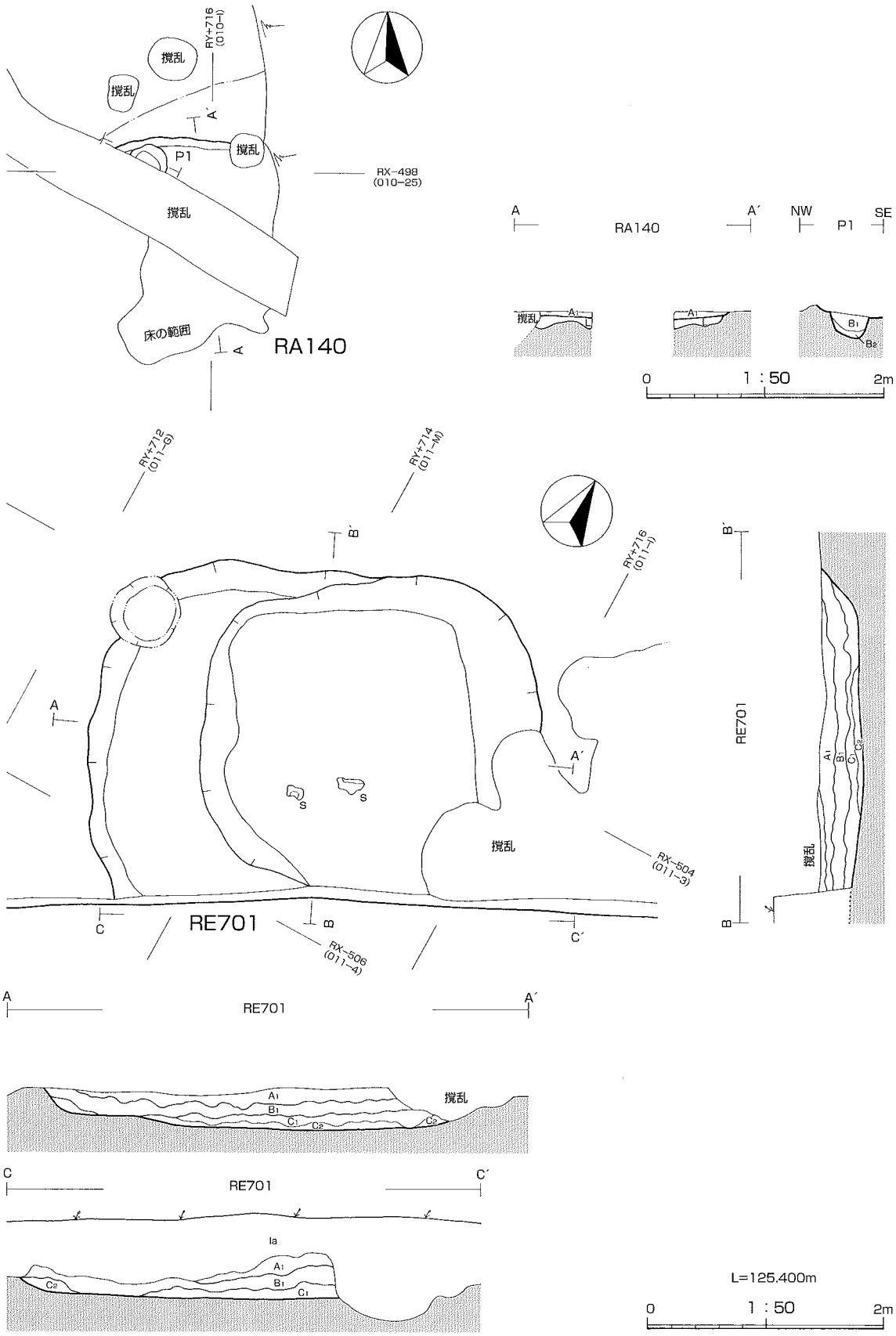
底面の状態　ほぼ平坦　**出土遺物**　なし



第10図　RA138竪穴住居跡



第11図　RA139竪穴住居跡、RE105竪穴跡



第12図　RA140竪穴住居跡、RE701竪穴跡

ＲＤ１０９土坑跡（第１３図）

位　　置　調査区南西　　**平 面 形**　不整楕円形　　**主軸方向**　Ｎ２°Ｅ

規　　模　長軸上端 0.76 m・下端 0.62 m、短軸上端 0.64 m・下端 0.38 m

重複関係　なし　　**掘 込 面**　削平　　**検 出 面**　黄褐色シルト層上面

埋　　土　自然堆積による。黒褐色土を主体とし、２層に細別される。Ａ1層は粉状の灰白色火山灰を少量含む。Ａ2層は粒～塊状の褐色土をやや多く含む。

壁の状態　検出面から底面までの深さは 0.30 ～ 0.34 mをはかり、壁はほぼ直壁である。

底面の状態　ほぼ平坦　　**出土遺物**　なし

ＲＧ１０３溝跡（第１４図）

位　　置　調査区中央　　**平 面 形**　Ｌ字状東西に延び、東端は削平のため不明。

規　　模　長さは総延長 17.5 mをはかり、幅は上端 0.45 ～ 0.80 m・下端 0.12 ～ 0.52 mをはかる。

重複関係　ＲＡ１３６・１３９を切る　　**掘 込 面**　削平　　**検 出 面**　黄褐色シルト上面

埋　　土　自然堆積による。黒褐色土を主体に粒～塊状の褐色シルトを含む単層である。

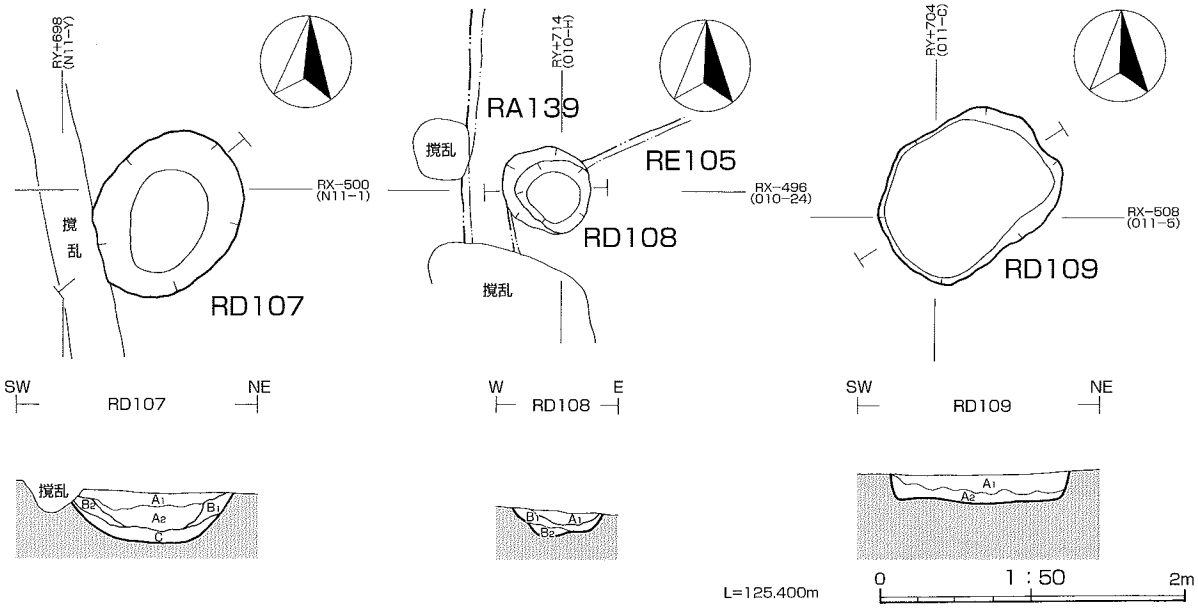
壁の状態　検出面から底面までの深さは 0.16 mをはかり、壁は外傾してゆるやかに立ち上がる。

底面の状態　底面はほぼ平坦であるが、部分によっては狭くなる箇所がある。

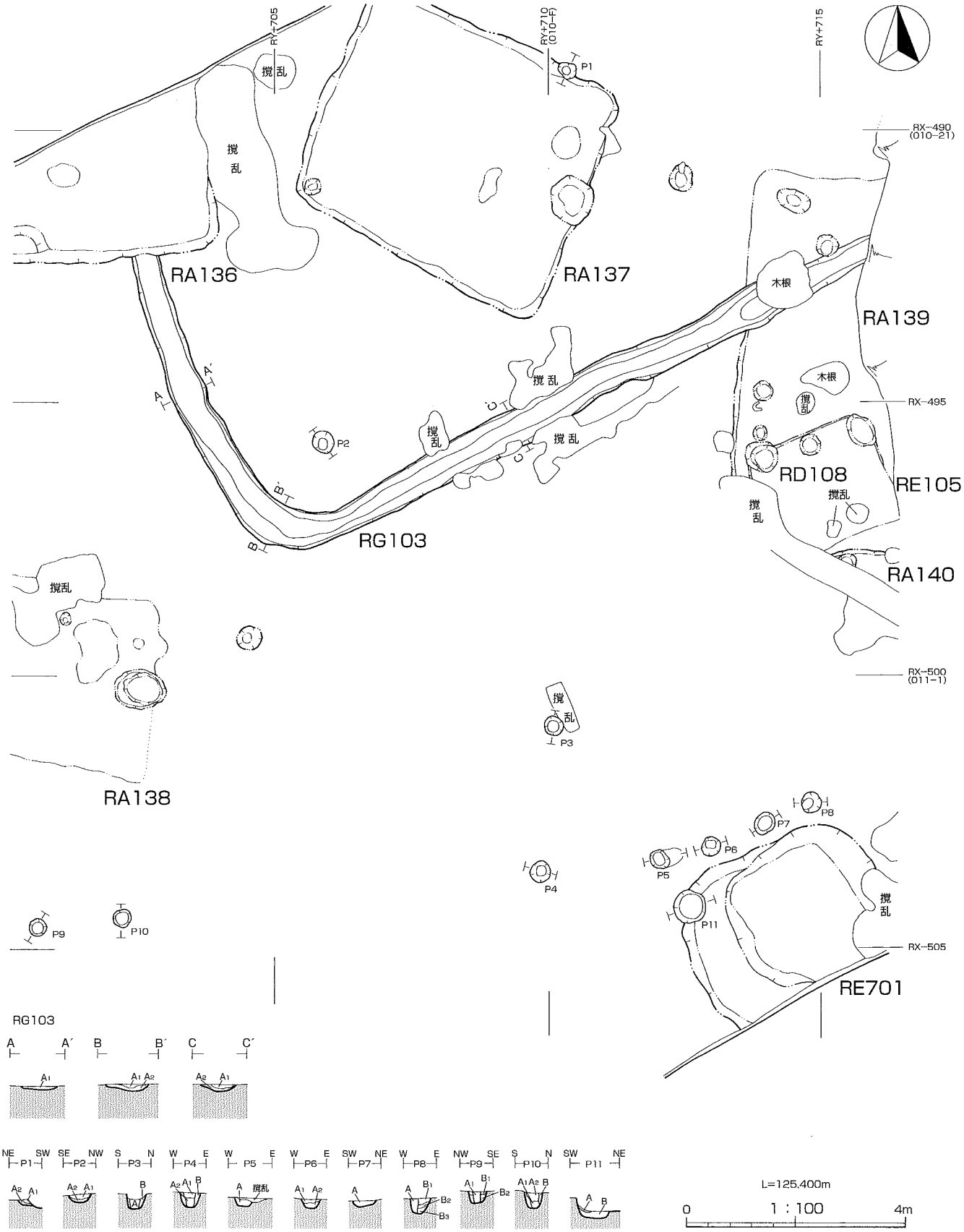
出土遺物　なし

ピット群　ピットは調査区内から 11口（Ｐ１～Ｐ11）検出されている。埋土は黒色土～黒褐色土を主体とするものが多い。Ｐ３・４・８・９・10には柱痕跡が認められる。いずれのピットからも、遺物等は出土していない。以下、ピットの深さである。

Ｐ１－0.10m、Ｐ２－0.17m、Ｐ３－0.26m、Ｐ４－0.27m、Ｐ５－0.15m、Ｐ６－0.18m、Ｐ７－0.12m、Ｐ８－0.28m、Ｐ９－0.22m、Ｐ10－0.28m、Ｐ11－0.36m。



第13図　RD107・108・109土坑



第14図　RG103溝跡、ピット群

3．出土遺物（第15～18図）

出土遺物については、19年度調査で出土したものだけでなく、第３～７次調査において主に竪穴住居跡から出土した遺物も掲載している。

第３次調査出土遺物１（第15図）

ＲＡ１０９　１は回転糸切り無調整の須恵器坏で、外反しながら底部から直線的に立ち上がる器形である。２・３は土師器坏である。２は内面が黒色処理され、ヘラミガキを施す。底部には手持ちヘラケズリを施す。体部下半がやや膨らむ器形である。３は内外面に黒色処理とヘラミガキを施す。４はあかやき土器甕で口縁部および体部上半を欠損している。外面にヘラケズリを施す。５は土師器小型甕で口縁部の内外面にヨコナデ、体部内外面にはヘラミガキを施す。６は土師器甕で体部下半～底部にかけて欠損している。口縁部の内外面にヨコナデ、体部外面に縦位の線刻を施す。７は須恵器甕の底部である。８は土師器甕で口縁部の内外面にヨコナデ、体部の外面にヘラナデ、内面にはハケメを施す。

ＲＡ１１０　９は須恵器坏で、回転ヘラ切り無調整である。10はあかやき土器坏で、回転糸切無調整である。11はあかやき土器甕で体部下半～底部が欠損している。体部外面にカキメを施す。

ＲＡ１１１　12は回転ヘラ切り無調整の須恵器坏である。13は回転ヘラ切無調整のあかやき土器坏である。14は土師器坏で内面に黒色処理とヘラミガキを施す・口縁部外面にもヘラミガキを施し、その直下に段を持つ。15は土師器甕で口縁部の内外面にヨコナデ、体部外面にケズリ、内面にヘラナデをそれぞれ施す。

ＲＡ１１２　16は須恵器坏で、回転糸切り無調整である。17は非ロクロ成形の土師器坏である。平丸底で体部に段を持つ。内外面にヘラミガキ、体部下半にヘラケズリを施し、内面は黒色処理されている。

ＲＡ１１３　18は須恵器坏で、口縁部～体部上半が欠損している。回転糸切り無調整である。

ＲＡ１１５　19は回転糸切り無調整のあかやき土器坏で、体部下半にやや膨らみを持つ器形である。

第３次調査出土遺物２（第16図）

ＲＡ１１７　１は須恵器の壺で、体部下半外面にカキメが施される。

ＲＡ１１８　２は須恵器坏で、口縁部がやや外反する器形である。

ＲＡ１１９　３～５はあかやき土器坏で、いずれも回転糸切り無調整である。３・４は口縁部が外反し、体部下半にやや膨らみを持つ器形である。５は体部下半に膨らみを持つが、底部付近でしまる器形である。６は土師器高台付坏である。内面にヘラミガキと黒色処理を施している。７は口縁部が欠損しており器形がはっきりしないが、あかやき土器の皿か。８はあかやき土器坏の底部である。９は土製の錘である。表面にケズリを加えて成形している。

ＲＡ１２０　10は土師器坏で、内面にヘラミガキと黒色処理を施している。体部下半がややふくらむ器形である。11は土師器小型甕で、口縁部の内外面にヨコナデ、体部内面はヘラケズリで器形を整えた後にヘラナデを施す。12は土師器甕で口縁部および体部上半を欠損している。内外面にヘラナデを施す。

ＲＡ１２１　13は土師器坏で内面にヘラミガキと黒色処理を施す。14～16は土師器甕である。14は口縁部の内外面にヨコナデ、体部外面はヘラケズリと内面にヘラナデをそれぞれ施す。15は口縁部外面にヨコナデ、内面にハケメを施し、体部外面をヘラケズリによって整形している。16は外面にヘラケズリ、内面にヘラナデを施す。

第３次調査出土遺物３（第17図）

ＲＡ１２３　1～3はあかやき土器の高台付坏の底部である。4はあかやき土器の甕のである。回転糸切り無調整で外面にヘラケズリを施す。5は土師器甕で口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はヘラケズリ、内面はヘラケズリ後にヘラナデを施す。

ＲＡ１２４　6は回転糸切り無調整の須恵器坏である。

ＲＡ１２５　7～13は11を除きすべて、回転糸切り無調整のあかやき土器の坏である。7・8は口縁部が外反し、体部下半にふくらみを持つ器形である。10は口縁部が大きく外反し、底部から直線的に器壁が立ち上がる器形である。

ＲＡ１２６　14～16は回転糸切り無調整のあかやき土器の坏である。14・16はやや外反し、底部から直線的に器壁が立ち上がる器形である。15は体部下半にやや膨らみを持つ器形である。17・18はあかやき土器の甕である。17は底部を欠損し、体部下半外面にヘラナデを施す。18は口縁部～体部上半を欠損している。外面の底部付近にカキメを施す。

ＲＡ１２７　17は須恵器の甕である。口縁部が大きく変形しており、窯焼成時に生じたものと考えられる。体部内外面にカキメを施す。20は回転糸切り調整の須恵器の坏である。21は回転糸切り無調整のあかやき土器坏で、体部下半にややふくらみを持つ器形である。22は土師器甕の底部で、外面にヘラケズリ、内面にヘラナデを施す。

第３次調査出土遺物４（第18図1～5）

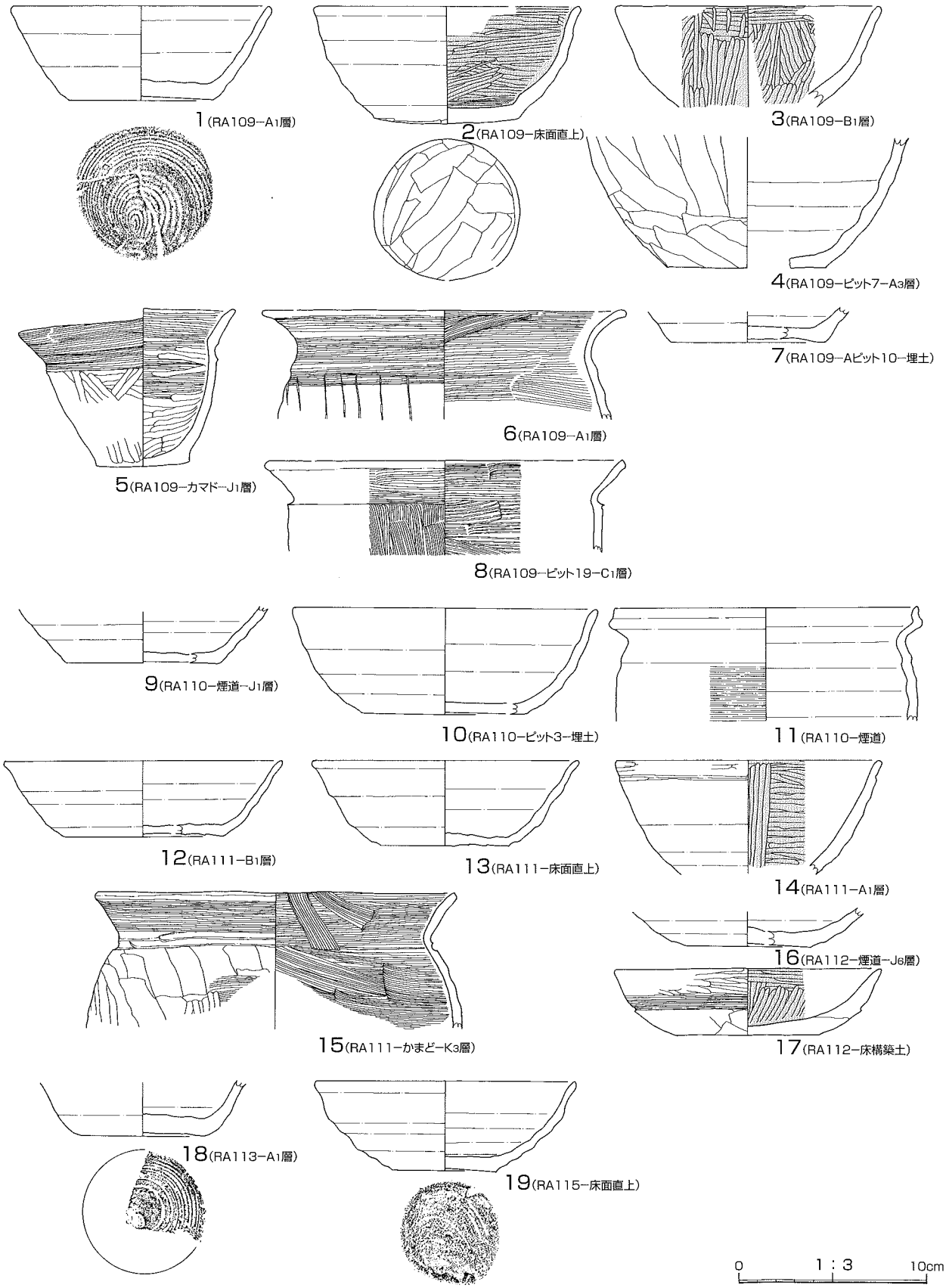
ＲＡ１２９　1～3はあかやき土器の高台付坏の底部である。4はあかやき土器の甕のである。回転糸切り無調整で外面にヘラケズリを施す。5は土師器甕で口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はヘラケズリ、内面はヘラケズリ後にヘラナデを施す。

ＲＥ１０２　3はロクロ未使用の土師器坏である。平丸底で体部に段を持つ。内外面にヘラミガキが施され、内面は黒色処理されている。4は土師器小型坏である。内外面にヘラミガキが施され、内面に黒色処理されている。5は底部が欠損した土師器小型甕である。口縁部内外面をヨコナデ、体部外面にハケメと内面にヘラナデを施している。

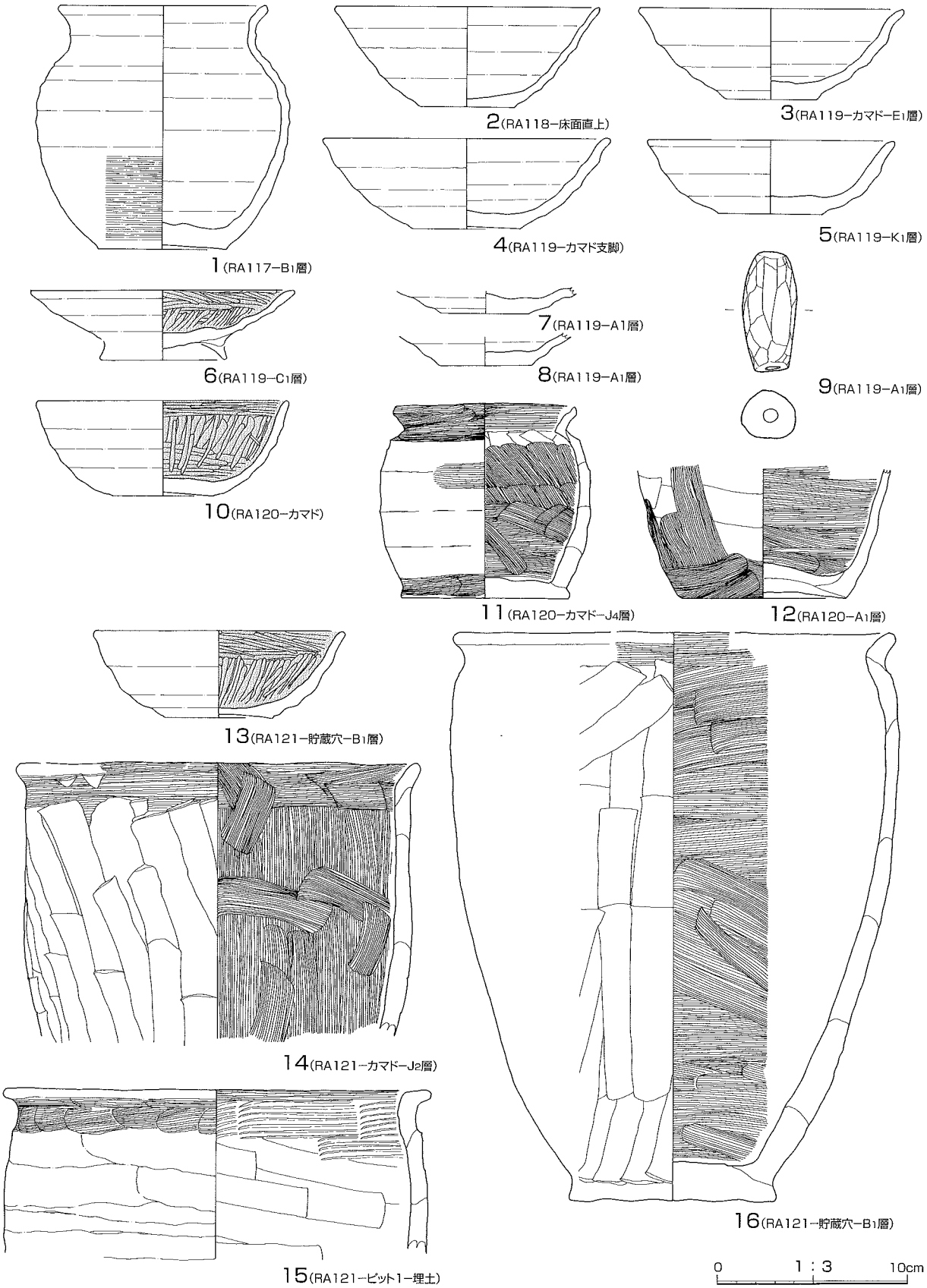
第４次調査出土遺物（第18図6～8）

ＲＡ１３１　6・7は須恵器坏である。6の底部切り離しは回転ヘラ切りである。7は口縁部が外反する器形で、底部の切り離しは回転糸切り無調整である。

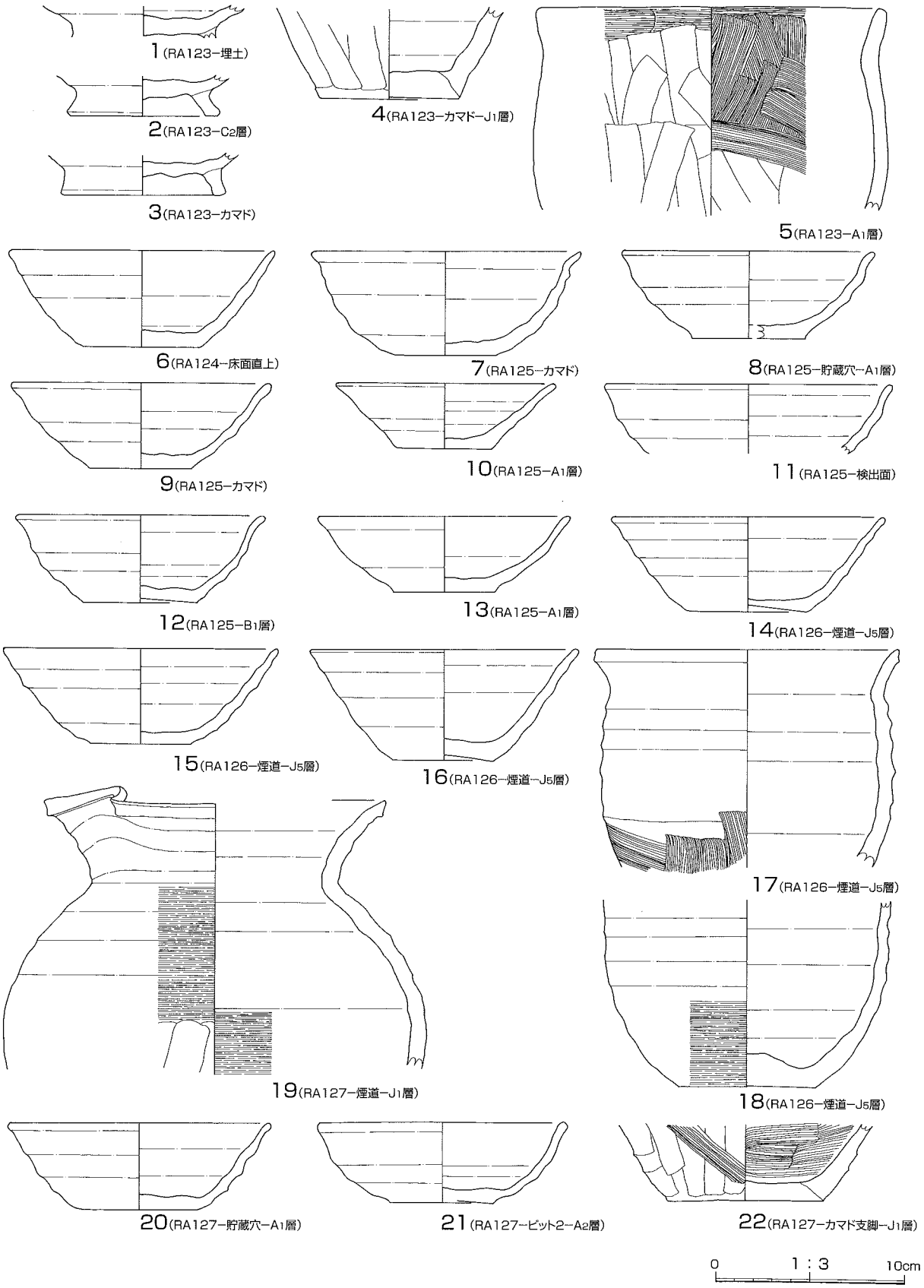
ＲＥ１３３　8は土師器小型甕である。口縁部内外面にヨコナデ、体部内外面にヘラナデを施している。



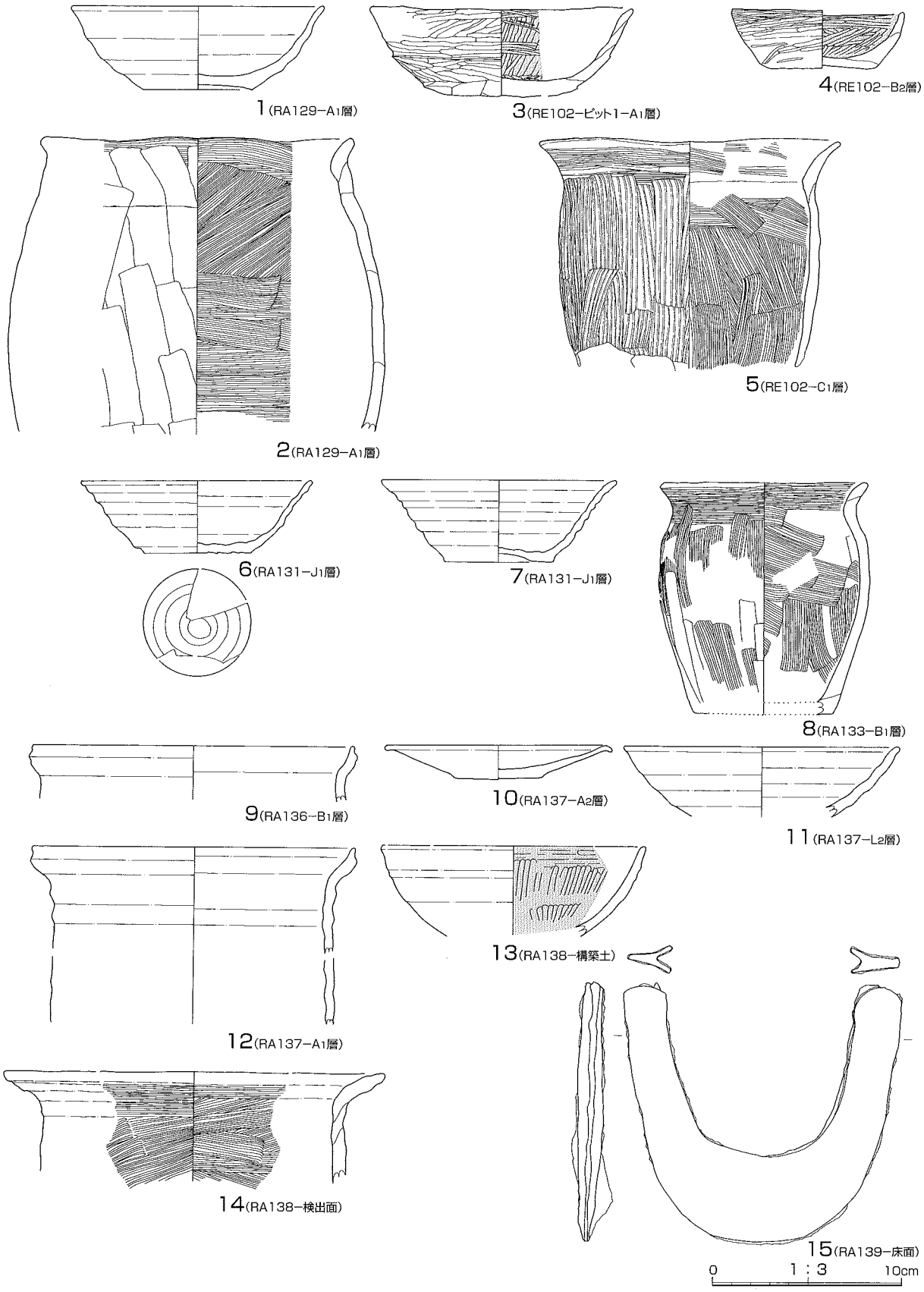
第15図　RA109・110・111・112・113・115竪穴住居跡出土遺物



第16図　RA117・118・119・120・121竪穴住居跡出土遺物



第17図　RA123・124・125・126・127竪穴住居跡出土遺物



第18図　RA129・131・133・136・137・138・139・RE102竪穴住居跡出土遺物

４．まとめ

検出遺構　第１次調査から今年度の調査までに確認された遺構は、古代の竪穴住居跡40棟、竪穴跡５棟、掘立柱建物跡３棟、土坑９基、溝跡３条、近世以降の竪穴跡１棟、掘立柱建物跡１棟、溝跡19条、土坑19基、土坑墓３基、焼土遺構９基である。

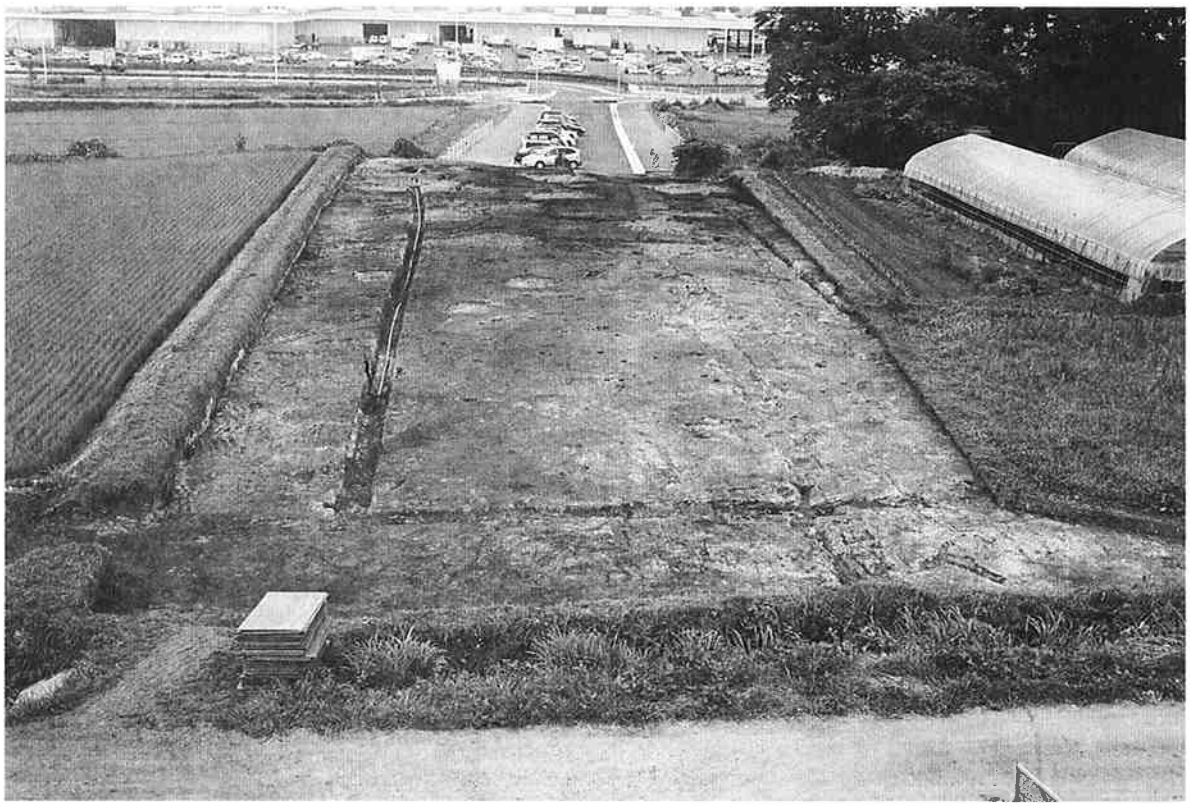
遺構の分布　古代の集落は現在確認されている範囲で、出土した土器から８世紀後半～10世紀前半まで営まれていたと考えられる。第１・３・８次調査の遺構検出状況から、竪穴住居は段丘縁に近づくほど分布密度が濃くなっていることが分かる。また、第３次調査区と第８次調査区間の段丘縁を踏査すると、畑地や切り通し等で多量の遺物散布状況が確認できることから、未調査区域ではあるが遺構密度が濃厚であると推定される。

窯　　跡　第３次調査で確認されたＲＡ１２７竪穴住居跡からは、口縁部が変形した須恵器甕（第17図19）が出土している。これは住居内のかまどや地床炉等での使用による二次焼成で生じたものではなく、須恵器を生産した窯場での焼成時の高熱による変形と考えられる。また、過去に段丘崖を踏査した際の表採資料にも、変形した須恵器が含まれていた。

このような失敗品の須恵器が、集落等の消費地で出土することは極まれであり、生産遺跡である窯跡で出土することが一般的である。集落に持ち込まれる要因の一つとして、一本松遺跡が須恵器生産に携わる工人達の集落であったことが考えられる。多少の変形ならば製品として流通させることは無理でも、自分たちで使用することは可能ではないだろうか。さらに、一本松遺跡周辺の地山からは、須恵器生産に欠かせない良質な粘土が採取できることが知られている。

このように状況証拠的なものではあるが、一本松遺跡周辺には窯跡が存在することが想定される条件が揃っている。今後の調査事例の増加や、さらなる周辺地域の踏査によって窯跡が発見されることを期待したい。

写　真　図　版

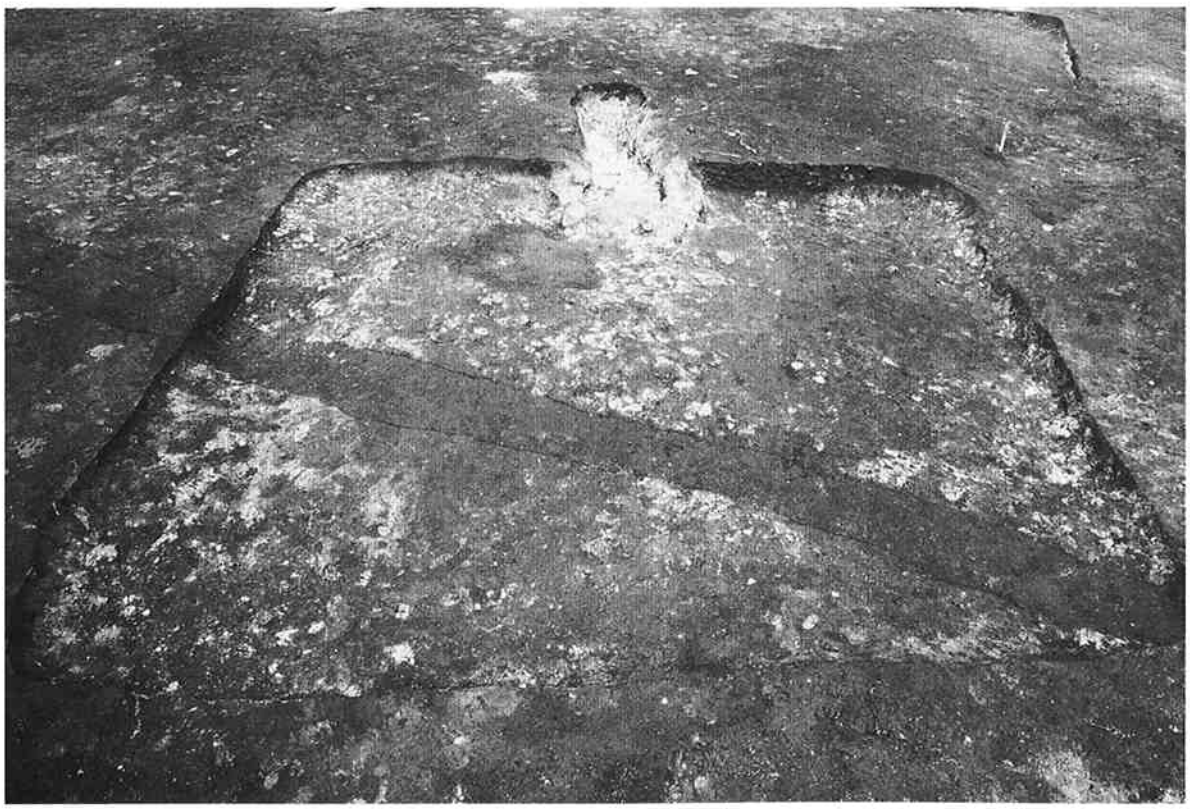


第３次調査区全景１（西から）

第３次調査区全景２（西から）

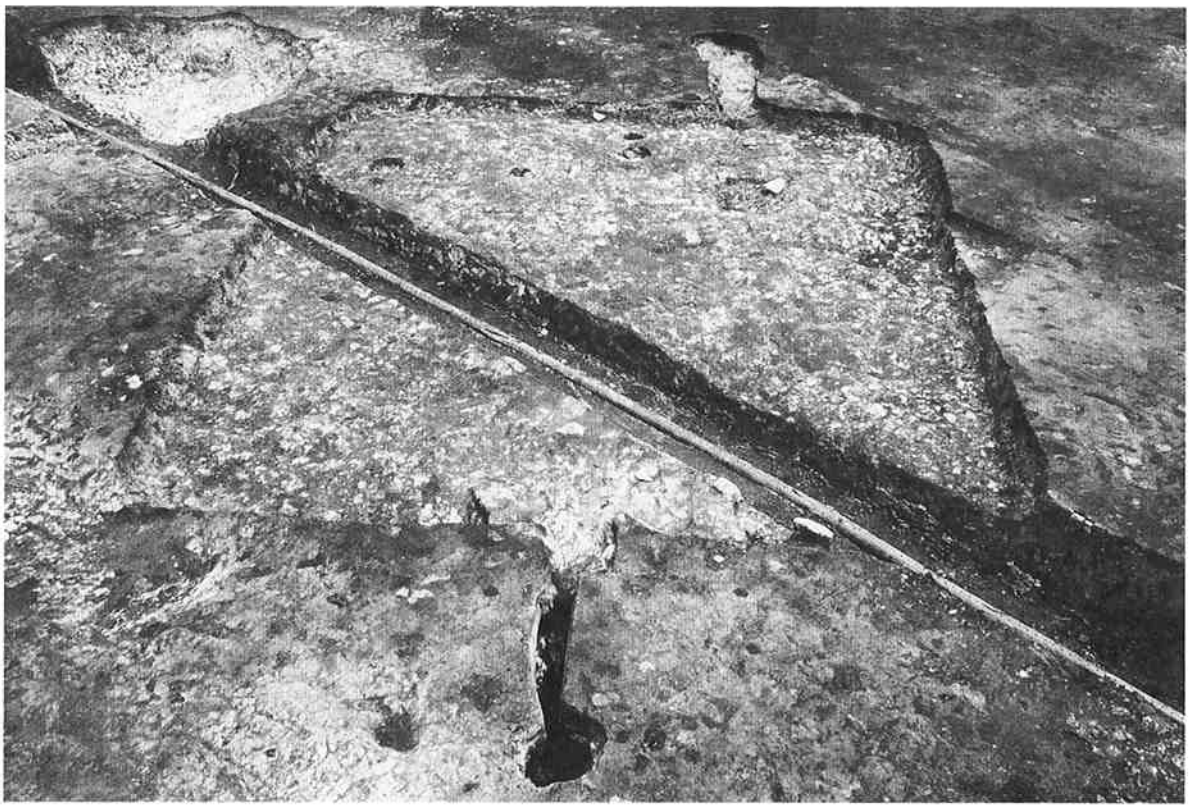
第２図版

第３次調査　ＲＡ１０９竪穴住居跡



第３次調査　ＲＡ１１０竪穴住居跡

第３次調査　ＲＡ１１２竪穴住居跡



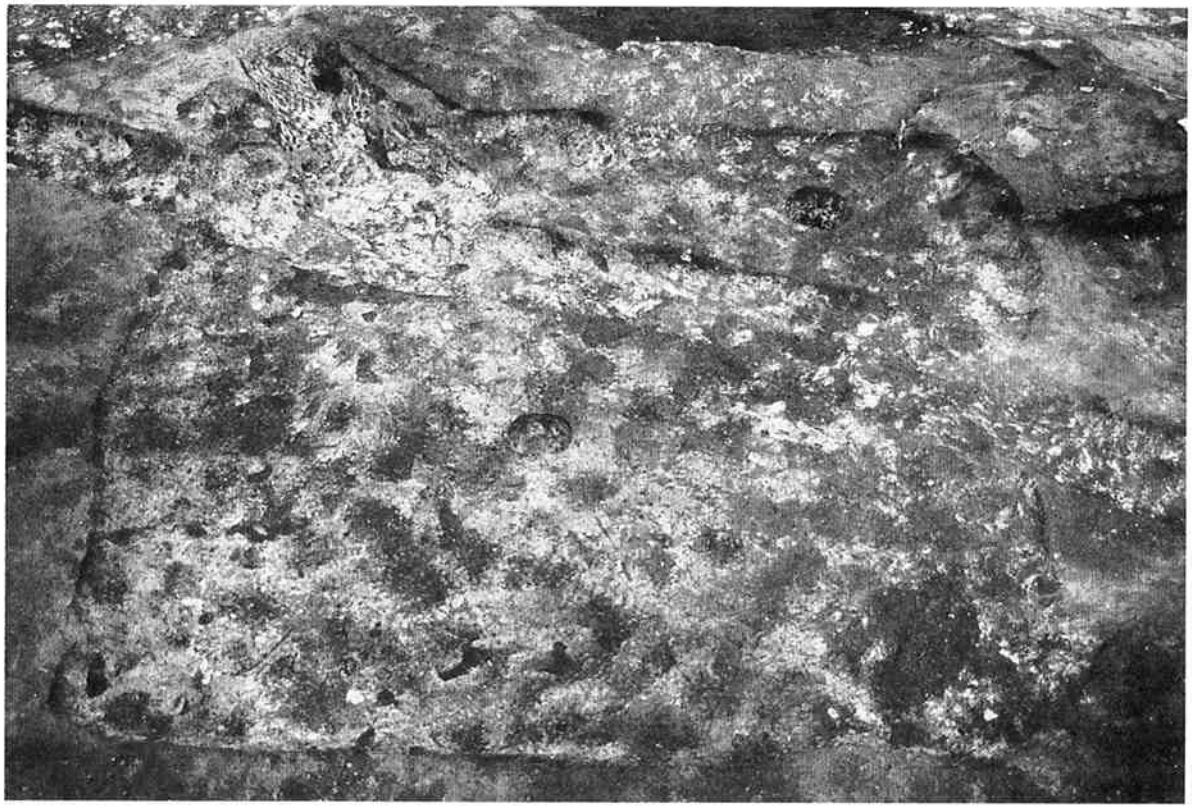
第３次調査　ＲＡ１１３竪穴住居跡

第４図版

第３次調査　ＲＡ１１５竪穴住居跡

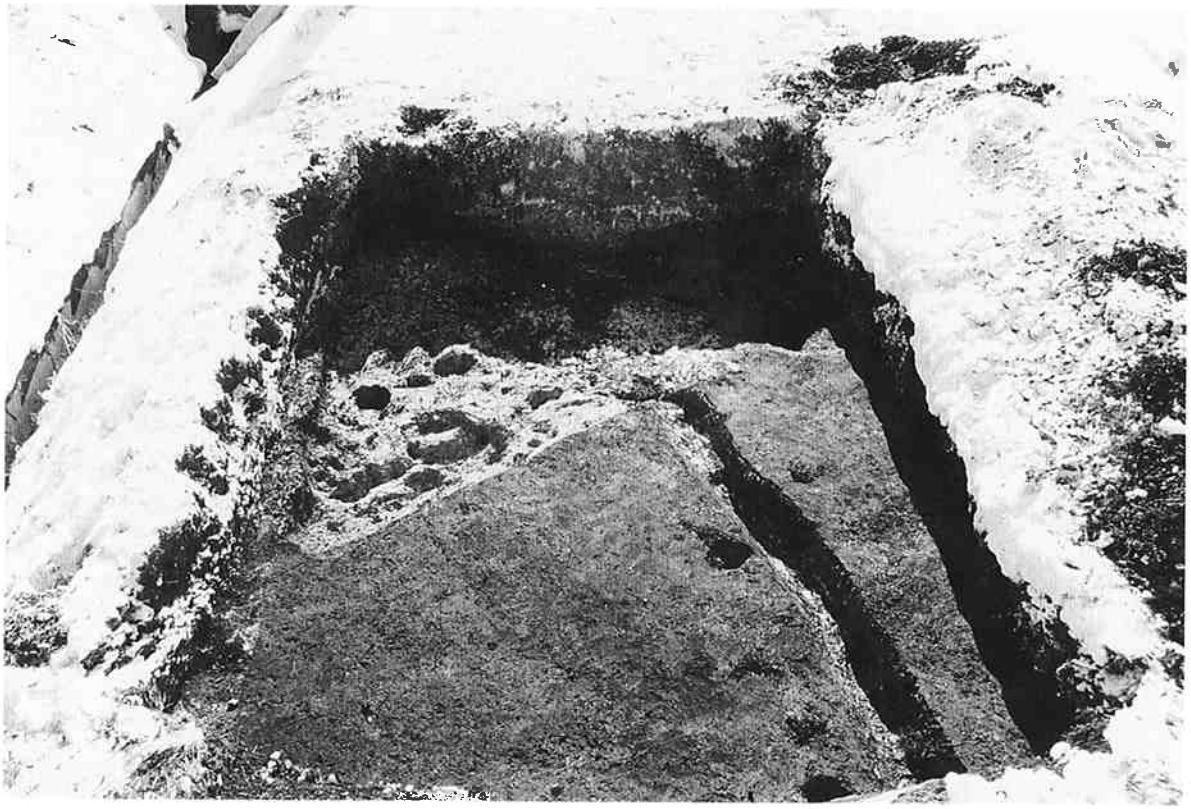
第３次調査　ＲＡ１２３竪穴住居跡

第３次調査　ＲＡ１２５竪穴住居跡

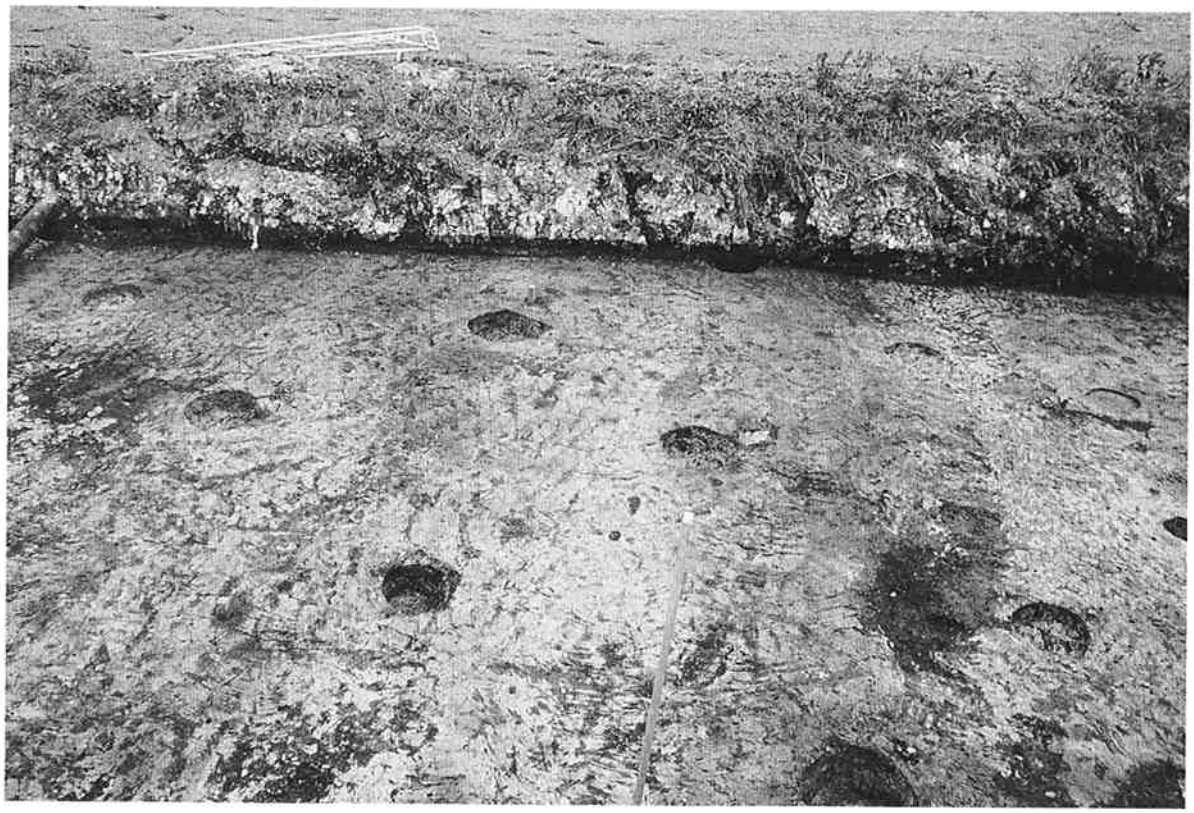


第３次調査　ＲＥ１０３竪穴跡

第６図版



第４次調査　ＲＡ１３３竪穴住居跡



第４次調査　ＲＢ１０２堀立柱建物跡

第５次調査区全景１（南から）

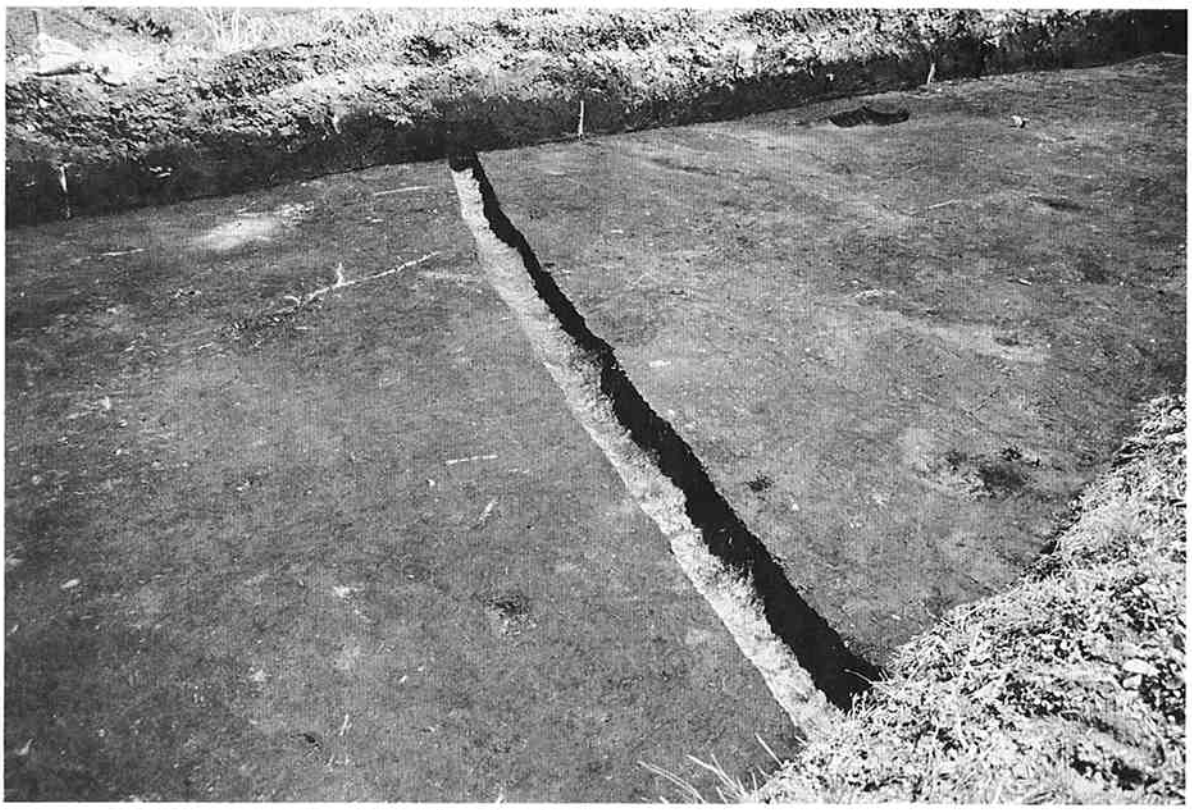
第５次調査区全景（北から）

第８図版

第５次調査　ＲＡ１３４竪穴住居跡

第５次調査　ＲＧ１０１溝跡

第５次調査　ＲＧ７１１溝跡



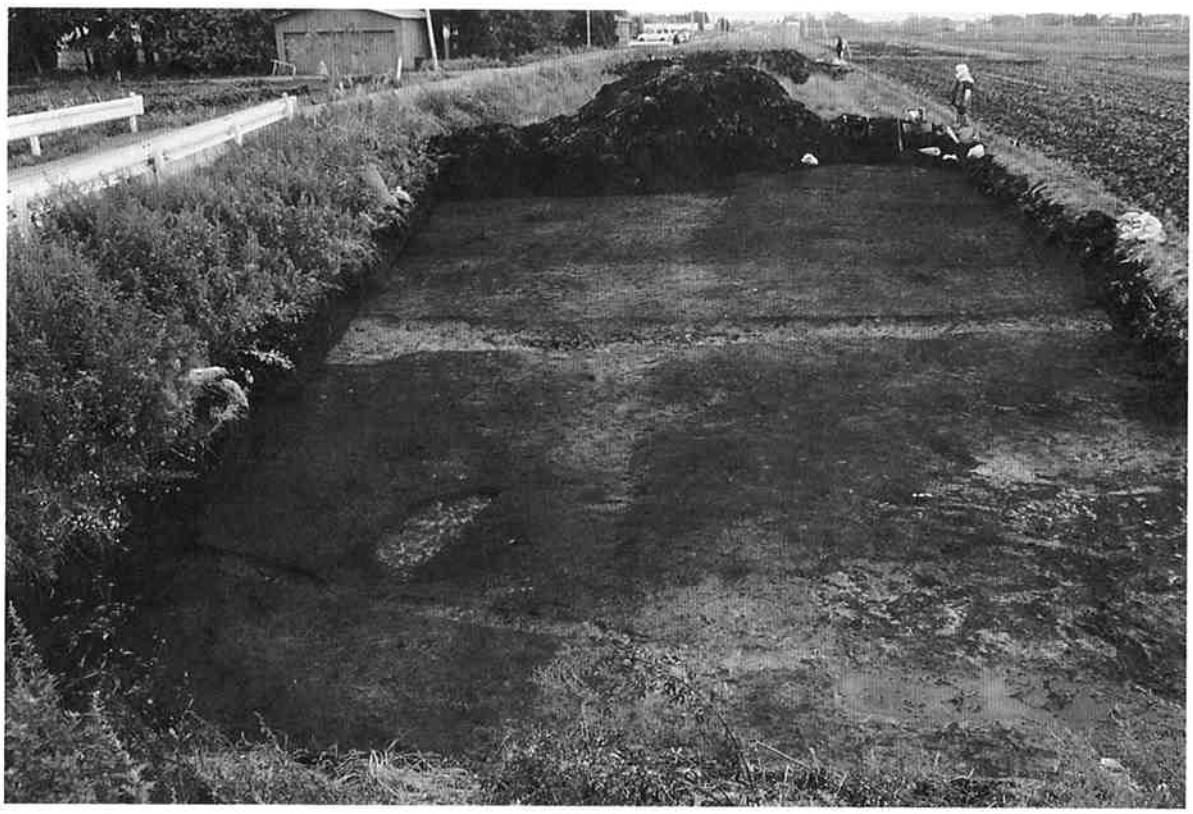
第５次調査　ＲＧ７１４溝跡

第10図版

第6次調査　試掘トレンチ1（北から）

第6次調査　試掘トレンチ2（北から）

第７次調査区全景（南から）



第７次調査　ＲＧ７１５溝跡

第12図版

第7次調査　RG717溝跡

第7次調査　RG719溝跡

第８次調査区全景１（西から）

第８次調査区全景２（西から）

第14図版

第８次調査　ＲＡ１３６竪穴住居跡

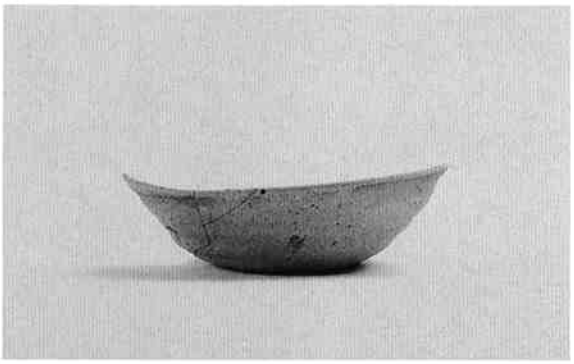
第８次調査　ＲＡ１３７竪穴住居跡

第8次調査　ＲＡ１３９竪穴住居跡

第8次調査　ＲＡ１３９竪穴住居跡出土　鉄製鋤先

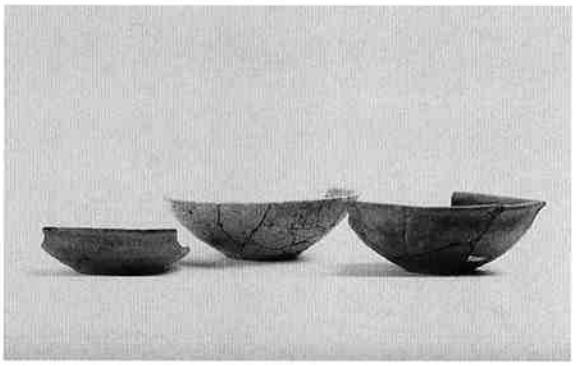
第16図版

ＲＡ１０９竪穴住居跡出土遺物



ＲＡ１１１竪穴住居跡出土遺物

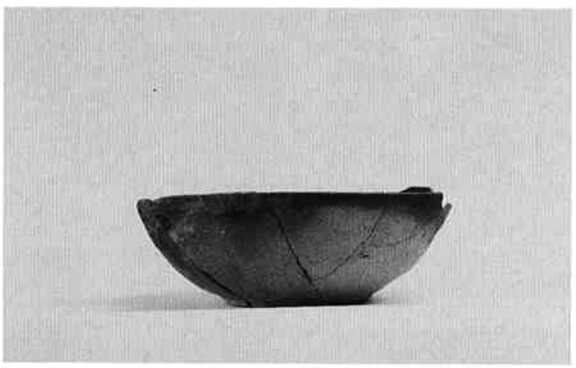
ＲＡ１１７竪穴住居跡出土遺物



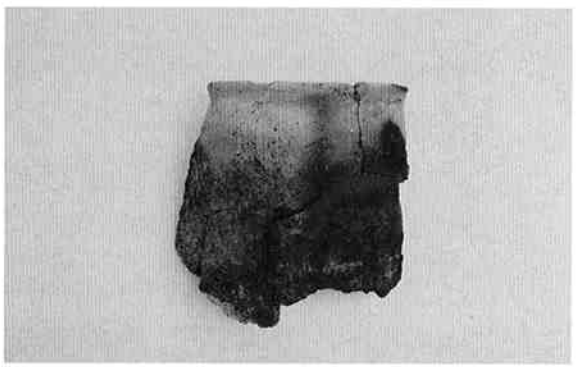
ＲＡ１１９竪穴住居跡出土遺物１

ＲＡ１１９竪穴住居跡出土遺物２

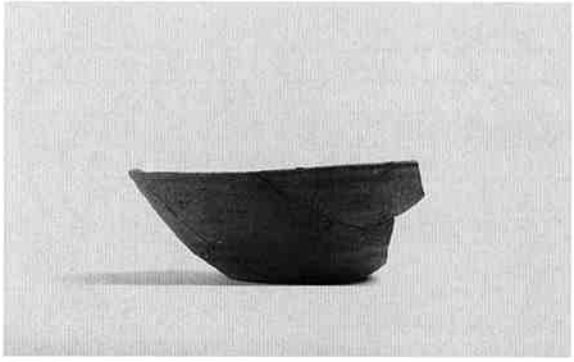
ＲＡ１２０竪穴住居跡出土遺物



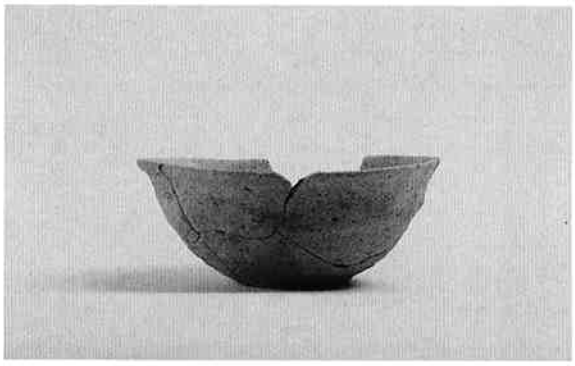
ＲＡ１２１竪穴住居跡出土遺物１



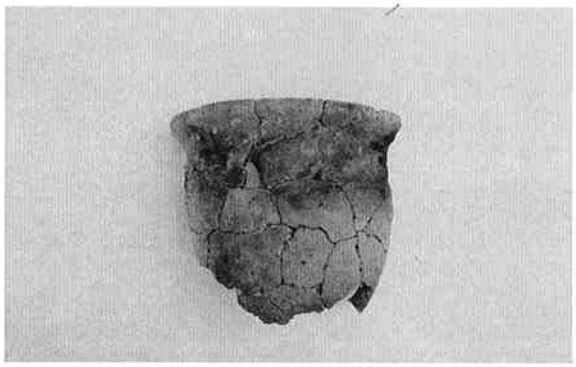
ＲＡ１２１竪穴住居跡出土遺物２



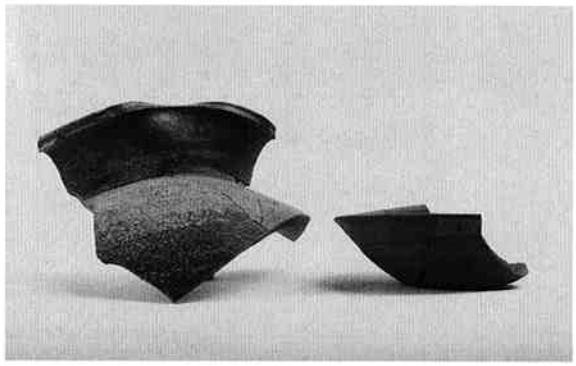
ＲＡ１２４竪穴住居跡出土遺物



ＲＡ１２５竪穴住居跡出土遺物

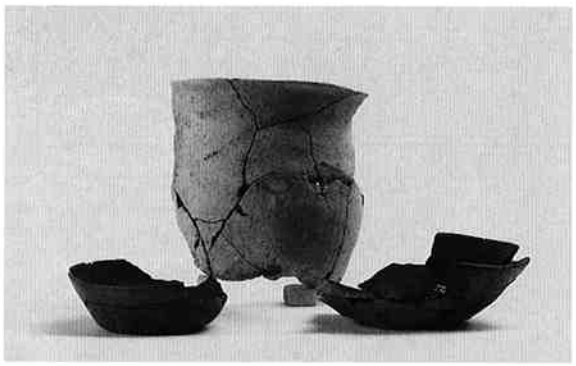


ＲＡ１２６竪穴住居跡出土遺物

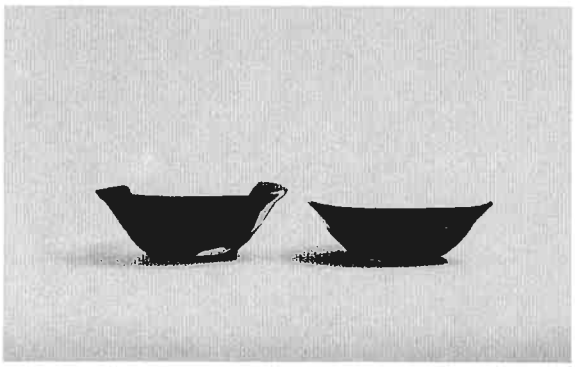


ＲＡ１２７竪穴住居跡出土遺物

ＲＡ１２９竪穴住居跡出土遺物



ＲＥ１０２竪穴住居跡出土遺物



ＲＡ１３１竪穴住居跡出土遺物

ＲＡ１３９竪穴住居跡出土遺物

報 告 書 妙 録

ふりがな	いっぽんまついせき
書名	「一本松遺跡」
副書名	市道釜淵谷地・上野線建設関連発掘調査報告書
編著者名	佐々木亮二　神原雄一郎
編集機関	盛岡市 遺跡の学び館
所在地	〒020-0866　岩手県盛岡市本宮字荒屋13番地１　TEL 019-635-6605
発行年月日	2008年３月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
一本松遺跡（いっぽんまついせき）	岩手県紫波郡矢巾町大字赤林地内（いわてけんしわぐんやはばちょうおおあざあかばやしちない）	3201		39° 38′ 57″	141° 7′ 37	第2次 1999.12.15～1999.12.20	852	市道建設
						第3次 2001.04.23～2001.08.06	1,411	
						第4次 2001.12.06～2001.12.20	292	
						第5次 2002.04.08～2002.05.10	600	
						第6次 2004.03.15～2004.03.18	882	
						第7次 2005.11.04～2005.11.24	1,574	
						第8次 2007.08.03～2007.09.14	395	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
一本松遺跡 第２～８次	集落跡	縄文	土坑 2		
		古代	竪穴住居跡 32 土坑 9 溝跡 3	土師器、須恵器、あかやき土器、鉄製品	
		近世	竪穴跡 1 土坑 19 焼土遺構 9 溝跡 19		

一本松遺跡

－市道釜淵谷地・上野線建設関連発掘調査報告書－

2008年３月31日　発行

編集・発行　盛岡市遺跡の学び館　〒020-0866　盛岡市本宮字荒屋13番地１
電話 019-635-6600　FAX 019-635-6605

印　　刷　株式会社　富士屋印刷所　〒020-0841　盛岡市羽場13地割30番10
電話 019-637-6391　FAX 019-637-7990